

CLAIR REPORT No. 439

シンガポールの華人社会 ～華人会館と中国新移民社会を中心に～

Clair Report No.439 (Sep 15, 2016)
(一財)自治体国際化協会 シンガポール事務所



一般財団法人

自治体国際化協会

「CLAIR REPORT」の発刊について

当協会では、調査事業の一環として、海外各地域の地方行財政事情、開発事例等、様々な領域にわたる海外の情報を分野別にまとめた調査誌「CLAIR REPORT」シリーズを刊行しております。

このシリーズは、地方自治行政の参考に資するため、関係の方々に地方行財政に関わる様々な海外の情報を紹介することを目的としております。

内容につきましては、今後とも一層の改善を重ねてまいりたいと存じますので、御叱責を賜れば幸いに存じます。

本誌からの無断転載は御遠慮ください。

問い合わせ先

〒102-0083 東京都千代田区麴町 1-7 相互半蔵門ビル

(一財)自治体国際化協会 総務部 企画調査課

TEL: 03-5213-1722

FAX: 03-5213-1741

E-Mail: webmaster@clair.or.jp

はじめに

シンガポールは1819年にイギリス東インド会社のスタンフォード・ラッフルズが上陸して以来、国際貿易港として発展してきた。その過程で中国などから多くの移民が流入した同国は、華人を多数派としながらも、多種多様な民族・言語・宗教を抱える国家として1965年にマレーシアから追い出されるようなかたちで独立することとなる。

独立後は経済発展を図るために積極的な外資導入政策をとり、定住外国人や移民が増え続けているが、1990年代以降は中国新移民が急増し、社会に大きな影響を与えている。

本稿では、シンガポールの華人社会について、特に伝統的な華人組織である華人会館と、1990年代半ばから中国新移民により組織された中国新移民社団を取り上げ、当地の華人社会の今日までの歩みを振り返りながら、現状と今後の展望を概観していきたい。

また、日本の自治体は従来から地理的に近い中国や香港、台湾を舞台に海外事業を展開してきたが、近年はシンガポールをはじめとする東南アジアにおいて、駐在員事務所の設置など、経済方面を中心とした事業展開が活発化している。シンガポールは「東南アジア地域のハブ」とよく言われるが、東南アジア各国で経済を牽引している華人たちのネットワークの中でも重要な「華人社会のハブ」という一面も有している。

華人人口の割合が高く、東南アジアにおいて特異な存在であるシンガポールがどのような歴史を辿って「華人社会のハブ」となったのか、そして中国新移民を一例として深まる中国との関係といった最新動向をまとめた本稿は、自治体の今後の東南アジア展開のために、いくばくかの手がかりとなるのではないだろうか。地方自治体をはじめ、関係者の皆様に本稿をご活用いただくとともに、内容改善のためのご指摘やご教示をいただければ幸いである。

なお、本稿の作成にあたっては、新加坡日本文化協会の頼涯橋会長、陳永力副会長にシンガポールの華人社会について様々なお話を聞かせていただいた。この場を借りて心から謝意を表したい。

一般財団法人自治体国際化協会 シンガポール事務所長

目 次

はじめに	1
概要	4
第1章 初期のシンガポール華人社会と華人会館の概要	5
第1節 多様な移民社会シンガポールの成立	5
第2節 初期の中華系移民の状況	7
第3節 シンガポールにおける華人会館の概要	9
1 血縁組織	10
2 地縁組織	10
3 業縁組織	12
第2章 華人会館の役割の変遷	13
第1節 19～20世紀初期 黎明期	13
第2節 政府の政策による衰退期	15
1 HDB住宅の建設と土地開発	15
2 外交・国民統合	15
3 教育制度改革と二言語政策	16
4 「スピーク・マンダリン（華語を話そう）」キャンペーン	17
第3節 1986年 華人会館の転機：「新加坡宗郷会館聯合總會」の設立	19
第4節 華人会館への「公的な」後押し	21
第3章 華人会館の課題と展望	22
第1節 華人会館が直面する課題	22
1 伝統文化の継承と発揚	22
2 方言の保存	23
3 若者をどう取り込んでいくか	24
第2節 華人会館の新たな役割と近年の注目すべき動向	25
1 多民族国家シンガポールにおける民族間の架け橋	25
2 華人ネットワークの強化と拡大	26
(1) 華人会館を活用した華人企業家の影響力	26
ア シンガポール華人企業グループの事例	27
(ア) 旧・華聯銀行（OUB）グループ	28
(イ) 大華銀行（UOB）グループ	29
(2) 華人会館の国際化と国際的な華人ネットワークの構築	31
ア 世界規模の華人の大会・聯誼会	31
イ 世界中の中華総商会による世界華商大会	35

(3) 中国および中国新移民との関係強化	37
第4章 中国新移民と中国新移民社团	38
第1節 中国新移民の増加と中国新移民社团設立の背景	38
第2節 中国新移民とシンガポール社会との軋轢	39
第3節 中国新移民社团の概要	41
1 総合型社团	41
2 地域型同郷社团	41
3 大学同窓会	41
4 中国人留学生や専門家たちによる社团	42
第4節 中国新移民社团の趣旨と財源	42
第5節 中国新移民社团の役割	43
1 中国新移民同士の交流、相互扶助	43
2 中国新移民とシンガポール社会との架け橋	44
3 中国文化の伝承、中国との経済文化交流の推進	44
第5章 華人会館と中国新移民社团との相違および交流	46
第1節 華人会館と中国新移民社团との相違	46
第2節 華人会館と中国新移民社团との交流	46
1 人的交流	47
2 イベント等における交流	48
3 新旧華人組織の連携の意義	48
おわりに	50
参考文献およびウェブサイト一覧	51

概 要

本稿はシンガポールで多数派を占める華人に焦点を当て、華人社会を論じるにあたって華人会館と中国新移民社団という新旧の華人組織を取り上げ、先行研究の成果を参考にしながら現地報道等の最新動向も加味して考察している。

第1章では、19世紀のシンガポール開港後に多様な移民社会が成立した状況や華人会館の設立が始まった初期の中華系移民の状況、加えて華人会館の概要について触れておきたい。

第2章では、イギリス植民地時代に華人社会を支える重要な存在であった華人会館が果たしていた役割、シンガポール独立後に政府の各種政策によって華人会館が衰退していった状況、そして華人会館の全国的組織設立を契機に1980年代中盤以降から再び活動を活発化させ、今では政府関係者の公的な支持を受けるまでになっている華人会館の役割の変遷を追っていききたい。

第3章においては、華人会館が直面するいくつかの課題とあわせて、新たな役割と近年の注目すべき動向について、華人ネットワークの強化と拡大を中心に華人会館の展望を論じてみたい。

第4章では視点を改めて、1990年代以降に急増した中国新移民がシンガポール社会に与えている影響や、彼らが組織した中国新移民社団の概要、役割等についてまとめている。

最後に第5章において、華人会館と中国新移民社団との間で徐々に深まっている交流の事例を取り上げ、新旧華人組織の相互連携によって新たな局面を迎えた華人ネットワークが、シンガポール華人社会の発展のみならず、シンガポールの国益にも直結するものであることを報告する。

なお、本稿で使用する「華人」とは、特に断りのない限り中華系住民を指すこととする。日本では現在でも「華僑」という呼称が使用されているが、厳密には「華僑」とは中国国籍を有したままで中国（香港や台湾も含む）以外の地に長期に居住する中華系住民のことであり、「華人」とは現地国籍を取得した中華系住民のことである。また、華人により19世紀から設立された血縁・地縁・業縁組織については「華人会館」と呼ぶこととする。

そして、「中国新移民」とは、主に1980年代以降、中国から様々な目的・方法でシンガポールに移住した中国国籍の者とシンガポール国籍を取得した者を指し、「中国新移民社団」とは中国新移民により設立された組織を指すこととする。いわゆる新移民には香港新移民や台湾新移民もあり、彼らの設立した組織も存在しているが、紙面の都合上割愛し、本稿では新移民のなかでも最も数が多い中国新移民について考察している。

第1章 初期のシンガポール華人社会と華人会館の概要

第1節 多様な移民社会・シンガポールの成立

1819年にイギリス東インド会社のスタンフォード・ラッフルズが上陸したシンガポールは、大規模なゴムのプランテーション建設と錫鉱山開発のためにイギリスがマラヤに本格的に介入した19世紀末以降、中継・加工貿易港となって飛躍的に発展した。

シンガポールにアジアや世界各地から交易船が集まると人も集まった。イギリスの移民奨励政策によって、錫鉱山の労働者としてマラヤ¹に出稼ぎにやってきた大量の中国人（東南部沿海地域の福建省・広東省の出身者が多い）や、ゴム園の労働者としてやってきたインド人労働力の一大中継地となり、貿易や商業に従事したり、港湾・建設労働者や家事手伝いとしてシンガポールに居住する者が増大した。

図1-1 シンガポールの人口構成の推移（単位＝人、カッコ内は％）

年	華人	マレー人	インド人	その他	合計
1824	3,317 (31.0)	6,431 (60.2)	756 (7.1)	179 (1.7)	10,683 (100)
1830	6,555 (39.4)	7,640 (45.9)	1,913 (11.5)	526 (3.2)	16,634 (100)
1836	13,749 (45.9)	12,538 (41.8)	2,932 (9.8)	765 (2.5)	29,984 (100)
1840	17,704 (50.0)	13,200 (37.3)	3,375 (9.6)	1,110 (3.1)	35,389 (100)
1849	27,988 (52.9)	17,039 (32.2)	62,884 (11.9)	1,580 (3.0)	52,891 (100)
1860	50,043 (61.2)	16,202 (19.8)	12,973 (15.9)	2,516 (3.1)	81,734 (100)
1871	54,572 (57.5)	26,141 (27.6)	10,313 (10.9)	3,790 (4.0)	94,816 (100)
1881	86,766 (63.0)	33,012 (24.0)	12,086 (8.8)	5,858 (4.2)	137,722 (100)
1891	121,908 (67.1)	35,956 (19.8)	16,009 (8.8)	7,727 (4.3)	181,602 (100)
1901	164,041 (72.1)	35,988 (15.8)	17,047 (7.8)	9,768 (4.3)	226,842 (100)
1911	219,577 (72.4)	41,806 (13.8)	27,755 (9.1)	14,183 (4.7)	303,321 (100)

¹ 現在の半島マレーシア、イギリス植民地下のシンガポールは行政的にはマラヤの一部であった。

1921	315,151 (75.3)	53,595 (12.8)	32,314 (7.7)	17,298 (4.2)	418,358 (100)
1931	418,640 (75.1)	65,014 (11.6)	50,014 (9.1)	23,280 (4.2)	557,745 (100)
1939	569,280 (77.1)	80,428 (10.9)	60,033 (8.1)	28,818 (3.9)	738,559 (100)
1947	729,473 (77.8)	113,803 (12.1)	91,927 (7.7)	22,941 (2.4)	938,144 (100)
1957	1,090,596 (75.4)	197,059 (13.6)	129,510 (9.0)	28,764 (2.0)	1,445,929 (100)
1970	1,579,866 (76.2)	311,379 (15.0)	145,169 (7.0)	38,093 (1.8)	2,074,507 (100)
1980	1,856,237 (76.9)	351,508 (14.6)	154,632 (6.4)	51,568 (2.1)	2,413,945 (100)
1983	1,927,000 (75.7)	371,500 (15.8)	161,700 (6.4)	56,400 (2.2)	2,516,600 (100)
1990	2,102,800 (77.7)	382,600 (14.1)	190,900 (7.1)	28,800 (1.1)	2,705,100 (100)
1993	2,228,600 (77.5)	407,600 (14.2)	204,500 (7.1)	33,500 (1.2)	2,873,800 (100)
2000	2,505,379 (76.8)	453,633 (13.9)	257,791 (7.9)	46,406 (1.4)	3,263,209 (100)
2010	2,793,980 (74.1)	503,868 (13.4)	348,119 (9.2)	125,754 (3.3)	3,771,721 (100)
2015	2,900,007 (74.3)	520,923 (13.4)	354,952 (9.1)	126,808 (3.2)	3,902,690 (100)

(出所: 顔 2009, p.20, Department of Statistics Singapore『Census of Population 2010』・『Population Trends 2015』より作成)

シンガポール全島が正式に大英帝国の支配下となった 1824 年、植民地政府が最初の人口調査を行った結果、総人口 1 万 683 万人に対して華人は 3,317 人で全体の 31%を占めた。その後もアジア各地からの移民で人口は増え続け、アヘン戦争が勃発した 1840 年になると華人の比率は 50%となった。1901 年には華人 72.1%、マレー系 15.8%、インド系 7.8%となり、今日のシンガポールの民族比率と同様の人口構成となっていた。

イギリスは急速に増加する労働移民や商人など多様な民族で構成される居住民どうしの紛争を避けるために、華人にはシンガポール川南岸の沼地を埋め立てた地域(チャイナ・タウン)、インド人にはその西のシンガポール川に面した一帯、川の東にはヨー

ロッパ人やアラブ人を割り当てるなど民族別の居住区を作った。この分割統治には、多様な民族が社会的に交わることでイギリス植民地支配への不満が一つになることを防ぐ狙いもあった。民族別の居住区は、後に国家として相互にバラバラの状態にされていた多様な民族を統合して「シンガポール人」を創出するという国民統合の達成にきわめて大きな困難を投げかけることになった²。

第2節 初期の中華系移民の状況

シンガポールを含む英領マラヤにおいて、イギリス植民地政府は、まず特権階級としてヨーロッパ人を保護し、次いで土着の民族として土地所有や公務員（植民地政府の下級役人や警察官等）採用にマレー人を優先した。中華系やインド系の移民に対しては労働力の確保以外に関心を示さず、福祉や教育に力が注がれることもなかった。中華系移民は自助努力によって財産と安全を守らなければならず、次節で取り上げる華人会館に代表される出身地ごとの血縁・地縁・業縁の三縁を利用した相互扶助団体を組織して、中華系移民社会内部での援助や統制にあたった。

上記のような三縁を利用した相互扶助団体の基層には、中華系移民の方言別の人的結合体である「幫（バン）」が存在することを忘れてはならない。他の東南アジア諸国と同様に、シンガポールの中華系移民も出身地ごとにかたまり、出身地の方言を話す者どうしで幫を形成していった。多くの移民の出身地である福建・広東両省は山がちな地形で地域差が大きく、十里行けば訛りが違い、百里行けば発音が異なると言われる。福建語、潮州語、広東語は話し言葉ではまったく通じないほどであり、シンガポールのみならず海外の中華系移民社会の基本的な境界線は、中国の省単位ではなく方言グループをもとに形成されている。シンガポールでは、福建幫、潮州幫、広東幫、客家幫、海南幫が五大幫として広く知られており、これに福州幫、福清幫、興化幫、広西幫、三江幫を加えて十幫ということもある³。

図1-2 シンガポール華人の人口構成の推移（単位＝人、カッコ内は％）

年	福建	潮州	広東	客家	海南	その他	合計
1881	24,981 (28.8)	22,644 (26.1)	14,853 (17.1)	6,170 (7.1)	8,319 (9.6)	9,799 (11.3)	86,766 (100)
1901	59,117 (36.0)	27,564 (16.8)	30,729 (18.8)	8,314 (5.1)	9,451 (5.8)	28,666 (17.5)	163,841 (100)
1911	91,547 (41.7)	37,507 (17.1)	48,739 (22.2)	12,487 (5.7)	10,775 (4.9)	18,520 (8.4)	219,575 (100)
1921	136,823 (43.4)	53,428 (17.0)	78,959 (25.1)	14,293 (4.5)	14,547 (4.6)	17,101 (5.4)	315,151 (100)

² 田村 2000a, p.32

³ 唐 1999, p.76

1931	186,604 (44.6)	82,369 (19.7)	94,191 (22.5)	19,222 (4.6)	19,845 (4.7)	16,409 (3.9)	418,640 (100)
1947	298,570 (40.9)	157,598 (21.6)	157,186 (21.6)	39,988 (5.5)	52,117 (7.1)	24,014 (3.3)	729,473 (100)
1957	459,535 (40.3)	245,190 (21.3)	205,773 (18.0)	73,072 (6.4)	78,081 (6.8)	78,945 (6.9)	1,140,596 (100)
1970	694,019 (43.9)	352,971 (22.4)	268,548 (17.0)	110,746 (7.0)	115,460 (7.3)	38,122 (2.4)	1,579,866 (100)
1980	843,495 (45.4)	409,259 (22.0)	305,956 (16.5)	137,438 (7.4)	131,975 (7.1)	28,104 (1.5)	1,856,227 (100)
2000	1,028,485 (41.1)	526,197 (21.0)	385,630 (15.4)	198,435 (7.9)	167,594 (6.7)	199,038 (7.9)	2,505,379 (100)
2010	1,118,817 (40.1)	562,139 (20.1)	408,517 (14.6)	232,914 (8.3)	177,541 (6.4)	294,052 (10.5)	2,793,980 (100)

(出所：顔 2009, p.34、Department of Statistics Singapore『Census of Population 2010』より作成)

右も左もわからない新規移民者が異郷で職を見つけて生活するために、幫は必要不可欠な相互扶助ネットワークであった。しかし、差異の大きい方言をベースとした同郷人の社会的・経済的相互協力体制という閉鎖的な側面もあり、幫どうしの利権争いや抗争も繰り返された⁴ため、中華系移民の社会は居住地も職業も幫ごとに異なるまとまりのないものとなった⁵。

このような状況のもと、幫相互の問題を解決するための上部組織として、またイギリス植民地政府、あるいはマレー人社会やインド人社会などとの間に問題が発生した際の中華系移民社会を代表する組織として 1906 年に「新加坡中華総商会」が設立された。中華総商会は商業組織や商工業者を保護することによって、華人商工業者を代表した総機構および権威機構となっただけではなく、社会慈善事業と学校の設立のための賛助を積極的



写真1 新加坡中華総商会

⁴ 唐 1999, pp.76-81 に具体例がいくつか示されている。

⁵ 方言グループ別の居住地住み分けは以下を参照：山下 1988, pp.50-67；顔 2009, pp.38-42

に行い、華人社会に大きく貢献してきた。またそれぞれの業縁組織（次節を参照）を管轄することによって業縁組織間の交流を促し、幫が一部の職業を独占していた状態の解消に尽力、とりわけ戦前において非常に顕著であった幫の対立的な関係の改善に寄与した⁶。

中華総商会の理事には幫ごとの割り当て⁷があり、有力な幫の指導者（ほとんどが企業家）が就任した。歴代会長に福建幫の有力者が多いことから、シンガポールの経済活動の主力として福建幫の存在感は大きい⁸。

第3節 シンガポールにおける華人会館の概要

本節では、前節で取り上げた幫の中核をなす華人会館の概要について、合田美穂氏の叙述に従ってまとめておきたい⁹。

華人会館はシンガポールでは宗郷会館とも呼ばれており、宗郷の「宗」は宗親つまり血縁を指し、「郷」は同郷つまり地縁を指す。華人会館とは華人の血縁および地縁による組織のことである。華人会館の中には「広東呉氏書室（広東系の呉姓の会館）」や「潮州楊氏公会（潮州系の楊姓の会館）」のように、血縁と地縁が一体化した会館も少なくない。また、先祖がその土地の出身者であるというだけで、そこで生まれ育っていないにもかかわらず、先祖と関連する宗郷会館に重複して入会している人もいる。

シンガポールにおける華人会館は、以下のとおり血縁、地縁、業縁の大きく3つの性質に分類される。

図1-3 シンガポールのおもな華人会館（カッコ内は設立年）

方言別	血縁組織	同郷組織	業縁組織
福 建	開閩王氏総会（1875） 星洲福建楊氏公会（1950）	福建会館（1860） 永春会館（1867） 金門会館（1870） 晋江会館（1918）	樹膠公会（1919）
潮 州	潮州江夏堂（1867） 潮州弘農楊氏公会（1941）	義安公司（1845） 潮陽会館（1926） 潮州八邑会館（1929）	布行商務局（1908） 海嶼郊公所（1922）
広 東	曹家館（1819） 四邑陳氏会館（1848）	寧陽会館（1822） 南順会館（1839） 肇慶会館（1878）	

⁶ 合田美穂「中華総商会」<http://news.nna.jp.edgesuite.net/free/mujin/copi/copi16.html>, 2000年12月19日。

⁷ 割り当ては1994年に廃止されて以降、7つの幫から最低1人ずつ理事会に送り出すことになった。顔 2009, pp.89-90、p.94

⁸ 顔 2009, pp.92-94

⁹ 合田 2013, pp.58-62；合田 2014, pp.99-100 を参照。

		広東会館 (1937)	
海 南	瓊崖黄氏公会 (1910) 海南呉氏公会 (1936) 瓊崖楊氏公会 (1974)	海南会館 (1854) 海南協会 (1956)	瓊僑珈琲酒餐商公会 (1934)
客 家	南洋頼氏公会 (1931) 客属黄氏公会 (1940)	応和会館 (1822) 茶陽 (大埔) 会館 (1858) 南洋客属総会 (1929)	当商公会 (1920)
福 州	徐氏公会 (1936) 福州洪氏公会 (1955)	福州会館 (1909)	福州木帮公会 (1911) 福州咖啡酒餐商公会 (1922)
興化・福清	江兜王氏公会 (1963)	福清会館 (1910) 興安会館 (1920)	車商公会 (1932)
三 江		三江会館 (1906) 温州会館 (1923)	上海西式女服同業会 (1938)

(出所：山下 1988, p.47、新加坡宗郷会館聯合総会や各組織のホームページを参考に筆者作成)

1 血縁組織

シンガポールで最初の血縁組織は、曹を姓とする人々による「曹家館(1819年設立)」¹⁰である。血縁組織では1920～30年代に設立されたものが半数以上を占めている。血縁組織といっても広義の血縁であって、親族であるとは限らない。先祖まで遡ると血縁関係に辿り着くと考えられる同姓によるものである。また、中には単一の姓による組織だけではなく、いくつかの姓の人々によって組織されたものもある。

2 地縁組織

地縁組織では、「新加坡寧陽会館(1822年設立)」が最も早く、省、府、県、郷、村といった様々なレベルのものが存在する。1965年のシンガポール独立前まで地縁組織は増加を続けていたが、独立後の増加はほとんど見られない。

シンガポールの場合は、中国東南部沿海地域を由来とするものが大半を占めているが、基本的には、それぞれの地域で使用されている方言に基づいて組織されたものである。広東省の場合では、広東語を話す人々、潮州語を話す人々、海南語(現在の海南省は、当時は広東省の一部であった)を話す人々、



写真2 新加坡永春会館

¹⁰ ラッフルズ先発部隊としてシンガポールに上陸した広東省台山県出身の曹亜志(1782-1830)が大英帝国旗を打ち立てた場所を含む土地に建てられた。顔 2009, p.13

客家語を話す人々などによって、組織が細分化されている。

「新加坡福建会館（1860年設立）」は到着した同郷人のために仮の住居の提供や就職あっせんを行っていただけでなく、会館の建物は福建系華人の冠婚葬祭の場にもなっていた。20世紀初期には会館内に崇福女学校と愛同学校、福建系華人の多い地域に道南学校を設立。さらに会館の有力者であった陳篤生（タン・トクセン）が医院を設立するなど、福建系華人のために貢献した¹¹。

「義安公司（1845年設立）」は広東省潮州の出身者による組織で、設立の目的は同郷との交流を深めることであり、かつては墓地を購入して同郷人のための埋葬業務も行っていった。オーチャードロードにあるシンガポール高島屋が入居するニーアン・シティ（義安城）は義安会社の資産の一部であり¹²、ニーアン・ポリテクニク（義安理工学院）¹³の敷地は義安会社が寄付したものである¹⁴。



写真3 新加坡福建会館



写真4 ニーアン・シティ(義安城)

¹¹ 合田美穂「宗郷会館の歴史（上）」

<http://news.nna.jp.edgesuite.net/free/mujin/copi/copi03.html>, 2000年9月19日。

タン・トクセン病院は現在ではシンガポールでも有名な公立病院の一つとなっている。

¹² 「ニーアン・シティ」の詳細は以下を参照：

<http://www.ngeeann.com.sg/zh/ngee-ann-development/> (最終アクセス2016年2月24日)

¹³ ポリテクニクとは工業技術や商業に関して興味のある生徒に、実習等の実地体験を中心とする教育を提供し、実業界の需要に合った実務レベルの人材育成を目的とする教育機関である。修学年数は3年間で、現在、シンガポール、ニーアン、テマセク、ナンヤン、リパブリックの5校が設置されている。

¹⁴ 「ニーアン・ポリテクニク」の詳細は以下を参照：

<http://www.ngeeann.com.sg/zh/ngee-ann-polytechnic/> (最終アクセス2016年2月24日)

3 業縁組織

19世紀末から20世紀初頭にかけてのシンガポール華人社会では、華語(マンダリン)がまだ普及しておらず、華人は主に話す方言ごとに生活圏を異にしていたため、業縁組織も方言色が強いものであった。よって、当時設立された多くの業縁組織は、地縁組織を兼ねていたとも言える。

「新加坡樹膠公会(1919年設立)」はゴムの製造および加工品を取り扱う業者の組織である。その大半の加入者が福建省南部(同安など)の出身者であった。

「新加坡当商公会(1920年設立)」は質屋を営む店によって組織され、大半の加入者が客家系華人であった。

「新加坡車商公会(1932年設立)」は設立当初は自転車業を営む業者によって組織され、人力車、自動車業務へと発展した組織であるが、大半の加入者が福建省北部(福清、興化など)の出身者であった。

現在の業縁組織は方言の衰退などで地縁的色彩は薄れているが、一部の職種はなお同じ方言グループによって独占、寡占されている。例えば、銀行・金融業界は福建幫、潮州幫、広東幫、コーヒーショップをはじめとする飲食業界は海南幫、福州幫、海産物・金銀業界は潮州幫、漢方薬・質屋業界は客家幫、自動車業界は福清幫が牛耳っており、それらの業界に他の幫が進出することは、強力なコネがない限り難しい¹⁵。同様の事例はマレーシアやタイ、フィリピンなどでも見られ、東南アジア各国でも幫の影響力は大きいと言える。

図1-4 シンガポールの華人方言集団のおもな伝統的職業分野

方言別	職業分野
福建	ゴム産業、金融、貿易、海運、雑貨店経営のほか各種分野で活躍
潮州	米・魚の販売、貿易、金融、漁業、生鮮食料品販売、屋台経営、雑貨店経営、布の販売・卸
広東	飲食業、建築・木工業、貴金属店経営、藤細工販売、金属・機械関係
海南	コーヒー店・レストラン経営、パン製造、果実販売、ホテル経営、理髪業、船員、家事使用人
客家	質店経営、薬局経営、教師・医者・政治家・弁護士などの専門職、布の販売
福州	コーヒー店経営、理髪業
興化	自転車・運輸関連業、輪タク車夫、自転車・自動車の修理・解体業
三江	家具店経営、書籍業、歯科医、クリーニング店経営、洋服仕立業

(出所：山下 1988, p.73)

¹⁵ 合田美穂『シンガポール華人社会のキーワード「幫」』
<http://news.nna.jp.edgesuite.net/free/mujin/copi/copi01.html>, 2000年9月5日のほか、
 合田美穂『華人「業縁」組織(上)』<http://nna.jp/free/mujin/copi/copi14.html>, 2000年12月5日、
 合田美穂『華人「業縁」組織(下)』<http://nna.jp/free/mujin/copi/copi15.html>, 2000年12月12日、
 顔 2009, pp.41-42 に具体例が示されている。

第2章 華人会館の役割の変遷

第1節 19～20世紀初期 黎明期

本節では、19～20世紀初期の黎明期における華人会館の果たした役割について、主に合田美穂氏の叙述に従ってまとめておく¹⁶。

華人会館が設立される以前、華人の社会的中心は、寺院や廟をはじめとした宗教施設であった。福建会館が設立される以前の1828年、福建人のサブグループである漳州人や泉州人が宗教組織である恒山亭を設立し、福建幫の社会的中心としていた¹⁷。また、福建会館の前身も1840年に完成した天福宮（シアン・ホッケン寺院）であり、福建会館の建設（1860年）当時、会館は天福宮の中に建てられていた¹⁸。



写真5 天福宮(シアン・ホッケン寺院)

中国からの移民がシンガポールに到着すると、まず自分の出身地または方言グループと関係のある組織に出向いてその会館の会員となり、場合によっては会館から仮の住まいや職を提供してもらうことも少なくなかった。当時の各会館の設立目的は「同郷人のための福利厚生と教育」という点で、ほぼ共通していた。会館は故郷との連絡役（手紙の中継）にもなったほか、死亡した移民の遺体を故郷へ移送したり、前述の義安公司のように現地で墓地を購入して埋葬業務を行ったりする会館もあった。

この時期の移民の形態は大きく二つに分けられる。一つは、現地で建設業などの労働に従事するために渡ってきた「苦力（クーリー）」と呼ばれた人々である。「苦力」には、自費で渡ってきた者、知人や仲介者などから借金をして渡ってきた者、中には騙されて連れて来られた者もいた。労働は過酷であり、病気になって命を落とす者もいた。現地の雇い主は彼らに簡易住居および食事を提供した。

もう一つは、自由に職を探しに来た人々である。先に現地に渡航している親族や同郷人を頼って渡航して職を探す「連鎖移民」、個人で渡航費を工面して職を探しに来た「流寓」などである。渡航した後に現地の会館を利用する移民としては、主にこの「連鎖移民」や「流寓」が多かった。

19～20世紀初期にかけて、華人会館は学校や病院などを次々と設立し、教育、就労、福利厚生といった面でメンバーおよびその家族の生活を全面的にサポートし、イギリス

¹⁶ 合田 2014, pp.100-104, p.106 を参照。

¹⁷ 市川 2000, pp.15-16

¹⁸ 「新加坡福建会館」の詳細は以下を参照：<http://www.shhk.com.sg/zh/our-heritage/>（最終アクセス 2016年2月24日）現在の福建会館は天福宮の真正面にあり、近代的なビルが立っている。

植民地政府に代わって華人社会を支え、不可欠な存在として機能していた。第二次世界大戦中は機能を一時停止させたが、戦後はメンバーに対する教育、医療、就労、祭祀、冠婚葬祭業務を再開させ、華人社会の中で再び重要な役割を担うようになった。

合田氏は、19世紀末期から20世紀初期にかけての華人会館の役割の中で、最も重要な役割の一つとして教育事業を挙げている¹⁹。当時シンガポールの植民地政府は、民族言語教育への支援には無関心であり、また、強い排斥政策を行うこともなかった。そのような自由な空間のなかで華人会館や華人企業家は積極的に華文学校を設立し、1905年から1920年にかけて華文学校が36校設立された。当時設立された華文学校は、ほぼすべてが方言を教育媒介言語としていた。華人会館によって設立された多くの華文学校も同様であり²⁰、方言グループを基本とした華人社会が形成されていった。

これら華文学校はシンガポール華人社会を支える人材を育成するための重要な存在となり、中華文化の継承および華人アイデンティティの涵養に大きな役割を果たすことになった。1920年代以降は華語（マンダリン）教育が普及、教育媒介語は方言から華語に移行²¹し、次節で述べるように、華人社会は華語を媒介語として、各方言グループから一つの華人社会としてまとまるようになった。



写真6 福建会館附属愛同学校

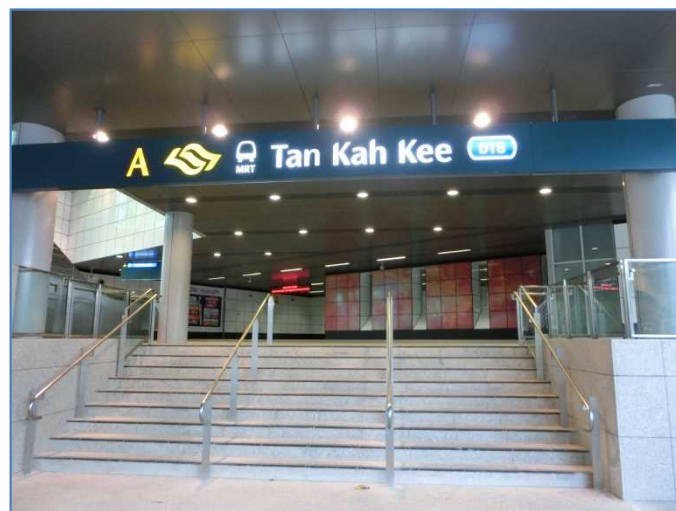


写真7 Hwa Chong Institution 近くのタン・カーキー駅

¹⁹ 合田 2014, p.101

²⁰ 福建会館が設立した道南学校（1906年設立）は教育媒介語が福建語であり、客家系の応和会館が設立した応新学校（1905年設立）では教育媒介語が客家語であった。

²¹ 1919年、陳嘉庚（タン・カーキー）と中心とする企業家によって南洋華僑中学（現・華僑中学（Hwa Chong Institution））が設立された。同校は方言ではなく華語を教学用語として、幫の別なく生徒を受け入れた。この頃から幫の垣根を超越した学校が次々と設立されるようになった。合田美穂「シンガポールにおける戦前の中国語教育（下）」

<http://news.nna.jp.edgesuite.net/free/mujin/copi/copi45.html>, 2001年7月31日。

第2節 政府の政策による衰退期

1959年、シンガポールがイギリスから自治権を獲得してからは、華人会館を取り巻く環境が大きく変化し、特に1965年の独立以降は会館がこれまで担っていた役割を政府が全面的に担うようになった。本節では、この時期のシンガポール政府の政策が会館にどのような影響を与え、衰退に繋がったのかを考察したい。

1 HDB住宅の建設と土地開発

戦前から独立当初のシンガポールの深刻な課題として、顔尚強氏は以下のような住宅不足を挙げている²²。例えば、1931年には人口41万8千人に対して住宅は約3万3千戸しかなく、1戸あたり11.3人も入居せざるを得ない人口過密で、住宅環境は非衛生的なスラム状態であった。この深刻な住宅不足は、第二次世界大戦で多くの家が破壊されたことでますます悪化した。リー・クアンユー首相（当時）は、政権を取ったばかりの1961年5月21日に発生して1万6千人あまりが家を失った大火事を契機に、「全国民持ち家計画」を打ち出し、各地にHDB住宅（公営住宅）を中心としたニュータウンを建設するようになった。

国民にHDB住宅を提供するために各地域にニュータウンを開発していく過程のなかで、ある特定の民族が集住していた地区の解体も同時に進められた。現在は観光地として保全されている民族街チャイナタウンやリトルインディアなどでも、HDB住宅開発が進められていた当時は取り壊しが進められていた。取り壊しと開発という過程を経て、1980年代半ばにはHDB住宅居住率が80%を超え、安定した住宅環境が整えられた²³。

この住宅政策の大きな特徴は、HDB住宅の入居者の比率が一定の地域ごとに、国民全体の民族比率と同程度になるよう配慮されていることである。これは、民族集住地域の解体と同様の目的・流れのなかで行われた施策で、一つの地域に一定の民族・言語・宗教の住民が集中しないよう工夫されている。これにより、日常生活において排他的なコミュニティの形成を防ぎ、異なるバックグラウンドを持つ住民との関わりが生まれることを狙っている。

HDB住宅の建設と土地開発により、方言グループによる華人の住み分けも解体され、華人会館が衰退する大きな要因となった。HDB住宅を中心としたニュータウンには、会館が新たに建設されることはなく、政府は積極的にコミュニティ・センター／コミュニティ・クラブ²⁴を設立、多民族からなる地域住民の居住地への帰属意識を育成して、民族間の融合に努めた。

2 外交・国民統合

1965年の独立当初、シンガポールは華人が多数を占めたことから、周辺諸国から中

²² 顔 2009, pp.46-47

²³ 鍋倉 2011, p.142

²⁴ 文化社会青年省の法定機関・人民協会の下で、日本の公民館や市民センターのように地域住民の市民活動の場や行政サービスの窓口として機能している。

国、台湾に次ぐ「第3の中国」と見なされ警戒されていた。特に隣国のマレーシア、インドネシアという反共産政策で中国と対立関係にあった二つのマレー系イスラム国家からは中国との関係で警戒されていたため、華人色をできるだけ排除した国創りに注力していた。外交においては、中国と台湾のどちらとも国交を結ばずに政治的には一定の距離を置き、貿易などの経済分野を中心に実質的な関係を拡大していった²⁵。

同時に、華人社会の各方言グループを含む多様な民族グループの融合に力を注いで、「シンガポール人」としての新しい国民像の育成を推進しなければならなかった。この時期の政府にとって、華人会館を含めた各民族グループの組織による活動は政策の大きな障害になると考えられていたことから、華人会館の活動を支援するような政策がとられることはなかった²⁶。

3 教育制度改革と二言語政策

前節で触れたように、華人会館が設立した多数の華文学校は華人社会の人材育成のために重要な存在であったが、1957年に新教育法が施行されてからは政府の公立学校へ移行されることとなり、華人会館の学校に対する影響力はしだいに弱まっていった²⁷。

また、独立直後の1966年からは英語を第一言語とする二言語政策が始まった。具体的には華人ならば英語と華語、マレー人は英語とマレー語、インド人は英語とタミル語を学ぶというものである。二言語政策による英語国家への誘導には、国際都市としての経済発展のためという実利的な側面と、多民族からなる国民の一体性を高めるための共通語としての統合政策的な側面があった。

シンガポールでは憲法で4つの言語が公用語とされていることから、独立後もしばらくは4つの学校システムが存在していた。しかし、外資導入政策によって英語の経済的価値が高まったことや就職面でも圧倒的に英語校出身者が有利であったことなどから、子どもを英語校に通わせる親が増加し、非英語校の児童生徒は徐々に減少、1987年には華語校と英語校が完全に統合され、華語校は消滅することとなった。さらに、中国・香港・台湾以外の地では唯一の華語大学であった南洋大学²⁸も、1980年に英語大学であるシンガポール大学に吸収合併されて現在のシンガポール国立大学となった。

このように英語教育が普及した結果、若い世代の華人は就職や進学に有利な英語を好んで使用するようになり、中国文化に対する関心がしだいに薄れていく要因の一つにも

²⁵ マレーシアは1974年にASEANで先陣を切って中国と国交を樹立した。中国と激しく対立していたインドネシアが1990年8月に国交を回復した後、シンガポールも同年10月に中国との国交を樹立した。

²⁶ 合田 2014, p.102

²⁷ ただし、現在でも華人会館は、伝統行事に関する活動の開催、奨学金の授与等を中心に付属学校に対して支援を行っているほか、華人会館幹部が学校の理事になっているケースも多く、旧華文学校とはなおも関係を保っている。

²⁸ 福建会館や中華総商会の会長を歴任した陳六使（タン・ラクサイ）といった福建幫を中心とする有力企業家から街の労働者まで無数の華人の寄付で1956年に開学、土地も福建会館が無償で寄付した。跡地には現在、南洋大学とは無関係の南洋理工大学が立っている。

なった。

図 2-1 言語別小学校の児童・生徒数の推移（単位＝人、カッコ内は％）

年	華語校	英語校	マレー語校	タミル語校	合計
1958	129,155 (45.0)	142,450 (49.6)	14,213 (4.9)	1,399 (0.5)	287,217 (100)
1968	174,072 (33.3)	310,635 (59.4)	36,086 (6.9)	1,818 (0.3)	522,611 (100)
1978	110,170 (22.9)	365,405 (76.1)	4,306 (0.9)	328 (0.1)	480,209 (100)
1983	34,708 (7.4)	435,909 (92.5)	417 (0.1)	38 (0.0)	471,072 (100)
1988	—	459,813 (100)	—	—	459,813 (100)

（出所：田村 2000a, p.189）

4 「スピーク・マンダリン（華語を話そう）」キャンペーン

シンガポールでは「スピーク・マンダリン（華語を話そう）」という華人社会に限定した政策キャンペーンも展開されている。

華人は国民の多数派集団だが、前項で取り上げた二言語政策にも関わらず、家庭での使用言語は、福建省出身者は福建語、広東省出身者は広東語といったように、中国語方言が多く使われていた。二言語政策において華人は英語と華語を学習していたが、これは母語である方言に加えて二言語、つまり三言語を学ばなければならなかったということであり、負担が大きかった。

二言語政策の華人への実効性を上げるため、また中国語方言が家庭で親から子へ継承されると、華人社会が一つにまとまるのが難しくなることから、英語を国民の共通語としたように、華語（マンダリン）を華人の共通語にしようと、政府は 1979 年に大々的な「スピーク・マンダリン」キャンペーンを開始した。華人は中国語方言を話すことを止め、華語を使うことを奨励した「華人・華語」と大きく書かれたポスターが公共バスの車体やショッピングセンターなどいたる所に貼られたほか、1981 年 11 月に評判の広東語テレビドラマが突然打ち切られたのを手始めに、1982 年からはすべての中国語番組が華語に切り替えられた。テレビやラジオから方言が姿を消し、マスコミも総動員してキャンペーンが推進された。

この「スピーク・マンダリン」については、田村慶子氏によれば、以下のように当時の国内・国外の政治情勢も大きく関係していた²⁹。与党・人民行動党は 1979 年 2 月の

²⁹ 田村 2000a, pp.245-249；田村 2000b, pp.253-254 を参照。

補欠選挙からの支持率低下³⁰の原因を英語の普及による国民、特に若者への西洋的価値の普及であると見なした。特に華人はマレー系のイスラム教、インド系のヒンドゥー教やイスラム教のような確固とした宗教がないために、HDB住宅への移転のなかで共同体を失い、二言語政策に代表される英語国家への誘導によって伝統的価値を急速に失っていた。独立以来政府が推進してきた開発による経済的成功で、もっとも伝統的価値を破壊され、西洋的価値に影響されたのが華人であり、彼らが政府批判の先頭に立っていると見なされたことから、「スピーク・マンダリン」には「アジア的価値」の模索という側面もあった。リー・クアンユー首相（当時）も、各地の集会で華語を学ぶことによる伝統的価値の復興を積極的に奨励した。

また、このキャンペーンの初期には華語校で教育を受けた華語派華人も非常に積極的に反応した。リー首相に代表される英語派華人³¹に政治的、社会的にも圧倒されていた彼らにとっては、公然と華語や中国文化を推進する機会となった。キャンペーン開始が前述の華語大学・南洋大学の消滅と同時期であったことから、華語派華人に対する懐柔策としての性質も指摘されている³²。

さらに、国際的背景としては、1978 年末に改革・開放路線への転換を打ち出した中国が東南アジア諸国との協力関係をより一層重視していたことから、華語の普及は中国とのコミュニケーションを容易にし、他国と比べても対中経済協力が有利になると予想されたことも挙げられる。実際に、「スピーク・マンダリン」は中国の政治・経済的な存在感が増すにつれて拡大され、現在も継続している。

図 2-2 を見ると、家庭で華語を話す華人が増加する一方、方言を話す華人が急速に減少している。このキャンペーンは一定の成果を上げていると言えるが、華人アイデンティティーの一つである方言を駆逐し、方言を中心とした豊かな文化を破壊している（心の奥底にあるものは方言でなければきめ細かに表現できず、後から強制された華語では限界がある等）として、反対意見が出されているのも否定できない。「スピーク・マンダリン」によって方言を話せない若者が増えたことから、方言文化の色彩が強い華人会館（特に地縁組織）に対する関心や興味を持つ人々も減っていき、華人会館が衰退していったのも自然な流れであった。

図 2-2 華人が家庭で最も使用する言語（単位＝％）

※1980 年と 1990 年は 15 歳以上、2000 年と 2010 年は 5 歳以上

使用言語	1980年	1990年	2000年	2010年
英語	5.4	11.9	23.9	32.6

³⁰ 同選挙において、比較的豊かな華人が多く住む地区で、野党候補者が 30%を上回る得票を得た。田村 2000b, p.246

³¹ かつて「海峡華人」と呼ばれた「プラナカン（マレー人と混血した人々の子孫）」等も含み、早くから英語を学んで日常生活でも英語を話し、西洋の風俗・習慣に親しんだ。独立以前から政界・官界の主流を占めており、与党・人民行動党でも主導権を握っている。

³² 中村 2009, pp.84-85

華語	7.3	27.9	45.1	47.7
中国語方言	86.8	59.8	30.7	19.2
福建語	40.6	29.1	14.7	9.4
潮州語	20.1	13.3	6.3	3.7
広東語	16.9	11.6	7.3	4.8
その他の方言	10.1	5.8	2.4	1.3
その他	0.5	0.4	0.3	0.5

(出所：田村 2000a, p.248、Department of Statistics Singapore 『Census of Population 2000』・『Census of Population 2010』より作成)

第3節 1986年 華人会館の転機：「新加坡宗郷会館聯合總會」の設立

これまで取り上げた政府による各種政策の影響から、1960年代以降、華人会館の存在感はしだいに希薄になり、とりわけ若い会員の獲得に困難をきわめて衰退していたが、華人会館の全国区機構「新加坡宗郷会館聯合總會」³³の設立を機に、その存在価値があらためて見直されるようになっていく³⁴。

1985年、主な華人会館の代表者が会議を開き、華人会館の組織力および社会への影響力を強化するために、各華人会館を統括する全国的組織を設立させる方針が打ち出された。翌1986年、オン・テンチョン第二副首相（当時）の支持を得て、127の華人会館の賛同の下で、華人伝統文化の継承および発揚、政府と華人社会との間における架け橋としての任務の遂行、華人会館の組織力の強化を目的とする「新加坡宗郷会館聯合總會」



写真8 新加坡宗郷会館聯合總會

(以下「宗郷總會」という。)が設立され、華人会館にとって大きな転機が訪れた。

前節でも触れたように、独立後のシンガポールにおいては、大きな課題であった国民統合のため、各民族グループによる活動が抑えられてきた。特に近隣諸国との関係から、華人色、中国色をできるだけ排除する政策が実施されていた。しかし、1980年代以降は、各民族グループが自らの文化やルーツを知ることこそが、国民統合の重要なカギになるという考え方が政府によって語られるようになり、華人会館は活動を徐々に活性化

³³ 「新加坡宗郷会館聯合總會」についての詳細は、以下を参照：<http://www.sfcca.sg/>（最終アクセス 2016年2月24日）

³⁴ 合田 2014, pp.103-104

させていった。

宗郷総会の設立後、その主導の下で、各華人会館は華人伝統行事に関するイベントの開催、後継者育成のための青年団の設立、華人文芸活動活性化のためのダンス部の設立、合唱団の設立、ドラゴンダンス部の編成、中国地域食文化の伝播のための食文化講座、華人文化についての理解を深めるための学術セミナーの開催などを積極的に実施していった。

宗郷総会自身が主催する年間行事としては、2016年で30周年を迎えて旧正月の風物詩となっている「春到河畔（リバー・ホンパオ）」のほか、「愛国歌曲大家唱」、「青年体育祭」、「全国学生象棋（中国将棋）トーナメント」、「年度傑出会館賞」などがある。行事開催以外にも南洋理工大学内に研究機関の「華裔館」³⁵を設立、シンガポールにおける中国文化の伝承を主題にした雑誌『源』や2012年9月からは新移民向けの雑誌『華匯』も発行している。宗郷総会の成立時に成立時に70であった団体会員数は、その活動が活発になるにつれて増加し、現在では205にまで増加している³⁶。

宗郷総会にはシンガポールにおいて最大規模を誇る福建会館も参加しており、活動資金や寄付も行い、福建人という枠を超えた活動をしている。現在では他の華人会館も地縁、血縁などの個別のサブグループごとの凝集性を減少させる傾向にあり、シンガポール華人としてまとまって活動するという状況に変化している。これは華人が現地化し、シンガポールの中華系国民となって社会が変容していく過程において、伝統的な組織である華人会館の活動にも影響がおよび、同様にシンガポール社会を志向した現地化が進んだ結果だと指摘されている³⁷。



写真9 2016年の春到河畔(リバー・ホンパオ)



写真10 華裔館(建物は旧・南洋大学の図書館だった)

³⁵ 「華裔館」についての詳細は、以下を参照：<http://chc.ntu.edu.sg/Pages/index.aspx>（最終アクセス2016年2月24日）

³⁶ 「新加坡宗郷会館聯合總會」<http://www.sfcca.sg/aboutus>（最終アクセス2016年2月24日）

³⁷ 市川 2000, pp.19-20

第4節 華人会館への「公的な」後押し

華人会館の活動が活性化した背景について、合田美穂氏は「政治家の公的な関わり」を挙げている³⁸。

1990年代以降、宗郷総会や各華人会館が主催する主要な行事の場に、国会議員、時には首相や大統領が主賓として出席したり、自らの先祖の地や姓を同じくする会館の名誉顧問として名を連ねたりすることが珍しくなくなった。リー・クアンユー元首相も、1990年代にはすでに「新加坡李氏総会」の名誉顧問として名を連ねていた。

近年では、首相級の人物が主賓や名誉顧問ではなく、「公的に」会館に関わるようになってきている。2011年8月、シンガポール建国46周年の祝宴が宗郷会館聯合総会において開催された際、数名の閣僚を引き連れて出席したリー・シェンロン首相は、設立25年目となった同会の「初代賛助人」となることを初めて「公的に」宣言した。

リー首相は2015年11月9日に開催された宗郷総会設立30周年式典にも出席し、「宗郷総会と各華人会館は政府と華人社会の架け橋として、華語による重要政策についてのコミュニケーション（対話集会等）において非常に有益な存在である」と賛辞を送ったほか、宗郷総会が建設中の「新加坡華族文化センター」³⁹に関しても「センターは若者を引き付けるプラットフォームとなり、シンガポールのユニークな華人文化のショーケースになるだろう」と述べている⁴⁰。

このように、宗郷総会をはじめとする華人会館は政府関係者の公的な支持を得るようになり、「華人アイデンティティを支える組織」として、さらには後述する「多民族間の架け橋」や「世界に広がる華人ネットワークの中心的組織」として、その存在価値が注目されるようになってきている。

³⁸ 合田 2014, p.106

³⁹ 同センターの賛助人でもあるリー首相は、2014年9月29日の着工儀式にも主賓として出席した。金融街シェントンウェイに2016年11月完成予定の11階建てビル建設費のうち90%はシンガポール政府が補助している。新加坡華族文化センターは華人文化の保存、継承、発揚や各民族グループ間の相互理解と和諧の促進を設立目的としている。

「新加坡華族文化センター」についての詳細は、以下を参照：

<http://www.singaporeccc.org.sg/>（最終アクセス 2016年2月24日）

⁴⁰ Lim Yan Liang. (2015, November 10). Work to strengthen social fabric, PM Lee Hsien Loong urges Singapore clan elders. The Straits Times. Retrieved on November 10, 2015, from

<http://www.straitstimes.com/singapore/work-to-strengthen-social-fabric-pm-lee-hsien-loong-urges-singapore-clan-elders>

第3章 華人会館の課題と展望

第1節 華人会館が直面する課題

新加坡宗郷会館聯合總會の設立を機に、政治家のバックアップも受けて、活動を活性化させていった華人会館だが、伝統の継承や後継者の確保といった課題は潜在している。ここではシンガポールの新聞記事等から華人会館の課題に対する取組みをいくつか紹介したい。

1 伝統文化の継承と発揚

2014年、客家人の組織である「新加坡豊永大公会」は中国の福建省、江西省、広東省に見られる客家人の大規模な土壁の円形集合住宅・円楼のレプリカ「三邑楼」をシンガポールに初めて建設した⁴¹。

何橋生会長（70歳・男性）は三邑楼について「特に若者にとって、客家文化の保存と促進のためのマイルストーンとなるだろう」、「将来的には内部に歴史文化博物館を作り、芸術展覧会やセミナー、文化公演等を開催できる文化活動センターにしたい」と述べている。さらに別の幹部（74歳・男性）も「客家の新しいランドマークである三邑楼には、学童にぜひ見に来てもらいたい」、「円楼を見たことのない多くの人々にとって、三邑楼は一つの好機となる」と、同会幹部は伝統文化の次世代への継承を重視している。このような活動が宗郷總會に認められ、豊永大公会は2014年度の傑出會館賞を受賞している。

また、同じく客家人の組織で、シンガポールにおける最古の客家人会館である「応和會館」⁴²は、2年におよぶ改修を経て、2016年にフリーパブリックギャラリーとして再オープンされる⁴³。會館内に設置される客家歴史文物館には、客家文化、衣装、芸術や歴史上の重要人物の展示等が予定されている。

同館の頼涯橋会長（男性）は華人會館の役割について、「現在の會館の社会的責任は変化しており、我々には客家文化を人々に教育するという新たな使命がある」と述べている。さらに、約10年にわたって若者を引き付けるための文化活動に携わっている同會館理事会メンバーのチャーリー・リー氏（43歳・男性）は、「多くの人々は自らをシンガポール人として認識しているが、自分の祖先がどこからやって来たのかをはっきり理解している者は少なく、ギャラリーは客家文化と伝統に対する人々の関心を呼ぶだろう」と述べている。

上記の二つの例はともに客家人の例であったが、宗郷總會のホームページには、華人

⁴¹ Leong Weng Kam. (2015, August 2). A Hakka tulou for Singapore. The Straits Times. Retrieved on August 2, 2015, from <http://www.straitstimes.com/singapore/a-hakka-tulou-for-singapore>

⁴² 2階建ての応和會館は1988年、政府によってナショナル・モニュメント（国家古跡）に指定されている。

⁴³ Melody Zaccheus. (2015, November 2). Hakka clan place to reopen as free gallery. The Straits Times. Retrieved on November 2, 2015, from <http://www.straitstimes.com/singapore/hakka-clan-place-to-reopen-as-free-gallery>

の各伝統行事が紹介されており、宗郷総会自身や各華人会館も伝統行事にちなんだ活動を展開している。例えば、冬のないシンガポールにおいて冬至に湯円を食べるといった伝統文化を継承、発揚していくことも、社会が変化していくなかでも華人会館の変わらない役割であり、課題でもあるだろう。

2 方言の保存

前述のように家庭で方言を話す華人が急速に減少している中、いかに方言を保存していくかということも、方言文化の色彩が強い華人会館の課題の一つである。方言を話せなくなってしまった若者の中には、近年、自身のルーツ探しや年配世代との交流のため、華人会館が実施する方言講座を受講する者も現れている⁴⁴。

「新加坡潮州八邑会館」のニジェル・リム氏（63歳・男性）は2000年から潮州語のクラスを開講している。近年の受講者は大半が20代から40代で、リム氏は「(受講者は)自らのルーツの方言を話せないことを恥ずかしいと思っているようだ」と述べている。潮州語講座は当初年間5～6回の開催であったが、方言への関心が高まった現在では年間10回となっている。

「新加坡茶陽(大埔)会館」は若者にもっと客家語に触れてもらおうと、初の客家語会話クラスを2013年12月に開講した。8回以上開催された30人定員のクラスはすぐに埋まり、受講者の3分の1は親子同伴で受講した。客家語と福建語を話す家庭環境で育った40代前半のリー・ミーニー氏(女性)は、9歳と11歳の子どもたちを連れて講座に参加した。リー氏は「私が使って育ってきた方言を子どもたちに教えたいと思った。そうしなければ、方言は私たちの世代とともに消滅してしまう」と述べている。

公務員のセバスチャン・タン氏(男性・41歳)夫妻は、娘たちに祖母(タン夫人の母)と福建語で話すように勧めている。タン氏は「娘が自分のルーツを知るのに良い。娘には福建語しか話せない曾祖父母とも交流できるようにもなってほしい」と述べている。この記事によると、方言を話すことが英語や華語の習得に影響しないというタン氏の考えに、大学准教授(男性・53歳)も賛同している。

なお、同一の記事内において、前章で取り上げた「スピーク・マンダリン」には、人々が同時に英語、華語、方言を習得することはできないというリー・クアンユー元首相の確信が背景にあることも触れられている。新聞を含めたメディアの言論がきわめて厳しい政府の統制下にあるシンガポールにおいて、政府の主張と正反対の意見が取り上げられていることは、方言が見直されつつあることの一つの現れなのかもしれない。

しかしながら、宗郷総会の青年委員会が2014年2月22日に開催した「各会館青年団と大臣の対話会」において、社会・家庭開発省のチャン・チュンシン大臣(当時)は、政府は方言普及を推進できないという立場を明確にしている⁴⁵。対話会で多くの青年団

⁴⁴ Lea Wee. (2015, July 12). Tracing roots via dialect. The Straits Times. Retrieved on July 12, 2015, from <http://www.straitstimes.com/lifestyle/tracing-roots-via-dialect>

⁴⁵ 楊 2014, p.34

メンバーが方言への関心を示し、政府による方言学習の推進を希望したことに対して、チャン大臣は「民間団体は方言普及の役割を担えるが、政府が注力することはできない。多民族社会において言語は敏感なテーマであるほか、今のところ方言学習の需要は決して大きくはなく、また方言を活用する環境もない」と述べている。

シンガポール華人としてのアイデンティティーの高まりなどから、方言を学びたいという若者は一定程度存在しているが、伝統的に方言文化と関わりの深い華人会館が今後どのように方言を保存・継承していくのかが注目される。

3 若者をどう取り込んでいくか

後継者となり得る若者の確保は、華人会館の存続にかかる最大の課題であると言えるだろう。

2015年10月31日、タン・チュアンジン社会・家庭開発相が来賓出席した「新加坡汾陽郭氏公会」設立75周年大会の夕食会においては、シンガポール人女性歌手の郭美美がヒット曲を歌うポップコンサートのコーナーが設けられた⁴⁶。また、30人の会館リーダーたちによる中国の祖先との繋がりをテーマにしたラップソングのミュージックビデオも披露された。

企画した同会の郭緒澤・第一副会長（58歳・男性）は「華人会館のセレモニーは伝統的な中国音楽、歌謡、舞踊などによる古めかしいものだという認識を変えたかった。若者に対して新しく現代的なアピールがしたかった」と、より多くの若者が2年前に設立した青年団に参加するように期待している。同会の700人のメンバーのうち、ほとんどが50代で60代、70代もおり、郭志全会長（58歳・男性）も「会館を未来に継続するためには、郭氏の若者をもっと取り込まねばならない」と述べている。

また、75周年大会にあわせて、シンガポール、マレーシア、ミャンマー、中国などからの代表者が集まった世界郭氏宗親総会の会議も開催された。郭氏の若者をいかに引き込んで交流を拡大させていくかが主要な議題となり、若者の相互往来の促進やビジネスチャンスの創出のため、「国際郭氏青年総会」の設立が全会一致で採択された⁴⁷。他にも「郭氏名人堂分享座談会」では、シンガポールのブレッドトーク・グループの郭明忠主席をはじめ、国内外の郭氏の名士4人による講演が行われ、コンサート等の斬新な手法と著名な華人企業家との交流機会の提供によって若者の取り込みが図られた。

2015年12月、1837年設立の「新加坡中山会館」は、18歳から36歳までの17人の青年団の若者を彼ら自身の祖先の地であり孫文の故郷でもある広東省中山市へ青年交流団として4日間派遣し、現地の若者との交流会等を実施した。17歳で中山から移民

⁴⁶ Leong Weng Kam. (2015, October 27). Glitzy gigs at Guo gathering. The Straits Times. Retrieved on October 27, 2015, from <http://www.straitstimes.com/singapore/glitzy-gigs-at-guo-gathering>

⁴⁷ 郭在権 (2015.11.03) 「新加坡汾陽郭氏公会 75 周年慶典暨懇親大会隆重举行」 中華郭氏網 <http://www.guohome.org/article-660-1.html> (最終アクセス 2016 年 2 月 24 日)

してきた同会館顧問の許社佳氏（86歳・男性）は、2007年から隔年で実施している青年団の中山への渡航費用のすべてを負担しており、「若者に会館への関心を持たせて会員にするためには、彼らのルーツの地を見せて親近感を持たせることが最善の方法だ。若者が会館に入らなければ会館に未来はない。」と述べている。

同会館青年団には57人のメンバーがおり、シンガポールの小規模会館においては最多かつ最も成長が著しい。このような活動により、中山会館は2014年度の傑出会館賞を受賞している。

許顧問の長男・許国偉氏（57歳）は、大学を卒業後20代のうちに会館メンバーとなり、若者を引き付けようとする父の取り組みをサポートし始めた。同氏は「私も頻繁に中山に行くことで利益を得た。現地の一族からのサポートもあり、中山でマーケティング会社と健康関連製品の工場を立ち上げることができた」と、会館での活動が中国でのビジネスチャンスに結び付いたことを強調している。同様に、会館の副主席であり中山で衣料品工場を合弁経営する許顧問の娘・許少娟氏（56歳）は「青年交流団のメンバーが自らの子どもたちを会館の活動に参加させ始めている」と述べている。

許顧問は「私や息子、娘が会館活動から利益を得られたことは光栄であり、若者たちにもそうあってほしい」と、自らのルーツの地に愛着を持つことができ、経済的利益にも繋がる会館活動の意義を語っている。

このように、現代の華人会館は、伝統文化の継承、発揚や方言保存といった若者のアイデンティティーに訴えかける方法に加えて、若者の実利に結び付くような活動を展開し、総合的な観点から後継者確保に取り組んでいく必要があると思われる。

第2節 華人会館の新たな役割と近年の注目すべき動向

2015年11月9日に開催された宗郷総会設立30周年式典に出席したり一首相が「宗郷総会や各華人会館は変化を受け入れてきたことから、社会の重要な支柱であり続けている」⁴⁸と述べているように、今日の華人会館は、独立から50年が過ぎたシンガポール社会において、時代の要請に合わせた役割が求められるようになってきている。

本節では合田美穂氏⁴⁹と顔尚強氏⁵⁰の叙述を中心に、華人会館の新たな役割と近年の注目すべき動向についてまとめておきたい。

1 多民族国家シンガポールにおける民族間の架け橋

1965年の独立以降、シンガポール政府は多民族国家をまとめるために、「民族間の融和」に細心の注意を払ってきた。独立直後、華人会館の活動は一步間違えば民族を分

⁴⁸ Lim Yan Liang. (2015, November 10). Work to strengthen social fabric, PM Lee Hsien Loong urges Singapore clan elders. The Straits Times. Retrieved on November 10, 2015, from <http://www.straitstimes.com/singapore/work-to-strengthen-social-fabric-pm-lee-hsien-loong-urges-singapore-clan-elders>

⁴⁹ 合田 2009, pp.29-33；合田 2015, pp.116-120 を参照。

⁵⁰ 顔 2009, pp.109-115、p.121 を参照。

裂させる側面も持ち合わせていると見なされる向きもあったが、華人会館は早い段階から徐々に政府の民族融和政策を支持する活動を始めていた。

1977年に「新加坡晋江会館」が一部の会館機能を晋江出身者以外の華人や他民族にも開放しており、2007年には「新加坡福建会館」がマレー語会話クラスを開講している。福建会館は5つの付属学校を有しているが、現在は会員子弟のみを対象とした学校ではなく、生徒も華人のみではない。また、付属学校の奨学金を授与された生徒のなかには、華人以外の生徒も存在する。「新加坡宗郷会館聯合總會」も、2005年以降、マレー伝統文化館、モスク、ヒンズー教寺院への訪問や、中国寺院見学や華人文化講座に他民族の人々を招待する「会館走透透シリーズ」や「シンガポール文化の旅シリーズ」⁵¹を開催しており、他民族との交流活動に積極的である。

また、宗郷総会は民族の融和を崩しかねないような事件には敏感に反応している。2016年1月14日にインドネシア・ジャカルタで4人が死亡するテロ事件が起き、シンガポールでもテロに対する警戒が高まるなか、シンガポールの治安当局は同年1月20日、過激派組織ISなどを支持する活動を行っていたとして、バングラデシュ人の外国人労働者20人余りの身柄を拘束し、強制送還したと発表した。この事件を受けて、宗郷総会の蔡天宝会長はすぐさま声明を出し、「極端な思想はごく一部の人々が過激化した結果に過ぎず、シンガポールの宗教と民族調和および建国以来50年で築き上げた信頼と融和に影響させてはならない。宗教と民族調和の意識を強め、シンガポール人との信頼と国民間の感情を繋いで、生じる可能性のある疑念を払拭し、シンガポールにおいてはいかなる極端で過激な思想もその画策を許してはならない」と、政府の民族融和政策を全面的に支持する強い意志を示している⁵²。

2 華人ネットワークの強化と拡大

筆者は、華人会館が伝統的に得意としてきた「華人ネットワーク」を強化、拡大していくことが、今後の華人会館はもとより、シンガポールの華人社会、さらにはシンガポールの国益にも繋がると考えている。

(1) 華人会館を活用した華人企業家の影響力

シンガポールのみならず東南アジアの華人社会では、経済的に成功した華人の多くが華人会館の要職に就き、華人会館を経済的に支えてきた。シンガポールでは、20世紀初期の華人社会の指導者と言われた陳篤生（タン・トクセン）、陳金鍾（タン・キムチン）父子、1930年代から終戦直後にかけて、東南アジアと中国で屈指の影響力を持っていた陳嘉庚（タン・カーキー）、1950年代の豪商で南洋大学設立に貢献した陳六使

⁵¹ 2015年4月25日はユーラシアン協会、5月31日はインド伝統文化館、10月18日はハデュージャ・モスク、11月14日は福海禅寺を訪問している。「新加坡宗郷会館聯合總會」<http://www.sfcca.sg/>を参照。（最終アクセス2016年2月24日）

⁵² 蔡天宝会長の声明については、以下を参照：<http://www.sfcca.sg/node/1691>（最終アクセス2016年2月24日）

(タン・ラクサイ)らが、それぞれ福建会館の会長職を歴任してきた。歴史的にみても、著名な華人企業家は、自らと関係する華人会館で会長や主席と呼ばれる要職に就き、会館を中心とする華人社会の中で指導者として君臨し、華人会館を通して華人社会を支えてきたが、その伝統は現代にも脈々と受け継がれている。

例えば、近年の中華総商会の会長や役員を務めた著名企業家では、黄祖耀（ウィー・チャーヨー）大華銀行（UOB）総裁が福建会館と金門会館、連瀛洲（リエン・インチョー）旧・華聯銀行（OUB）総裁が連氏公会、広東会館および潮州八邑会館、シムリムグループ総裁の孫炳炎（ソン・ペンヤム）が同安会館、中僑グループ総裁の林方華（リム・ファンホア）とインドネシアの政商として名が知られる林紹良（ストノ・サリム）が福清会館、マレーシア福華銀行役員の林理化（リン・リーホア）が福建会館と福州会館、シンガポール在住の永住権者で中国政府とも関係が深いインドネシアの政商、唐裕（トン・ジュウ）は安溪会館など、非常に多くの実例がある。

彼らは、自らの所属する華人会館に多額の寄付を行い、それによって会館は多種多様の活動を行うことができる。一方で、彼らは会館の要職に就くことによって社会的名声を獲得し、自らの社会的影響力を強め、華人社会全体とのネットワークを築いている。

ア シンガポール華人企業グループの事例

シンガポールの信用調査会社 DP インフォメーション・グループがまとめた 2012 年度企業売上ランキングによると、上位 100 社のうち 70 社が外資企業である。残り 30 社の地場資本の企業のうち 16 社は、大手通信会社のシンガポール・テレコム、シンガポール航空、複合企業のケッペル・コーポレーションなどの政府系企業であり、純粋な民間地場企業は 14 社にとどまることから、シンガポールの経済開発は外資企業と政府系企業を中心に行われてきたことがわかる。

上記 14 社の民間地場企業のうち 7 社は華人グループ企業であり、大手銀行グループの「華僑銀行 (OCBC)」⁵³、「大華銀行 (UOB)」⁵⁴とそれらの傘下企業や、不動産や金融など複合企業の「豊隆 (ホンリョン)」⁵⁵グループなど、独立以前から事業を展開してきた企業の存在感が大きい。シンガポールの有力華人企業は政治との関わりが薄く、インドネシアにおけるサリム・グループとスハルト元大統領のような癒着もなく、東南アジアの他の国の華人企業と比べると自力で発展してきた伝統がある。これはシンガポールで経済開発が始まった 1960 年代に、有力華人企業家が与党・人民行動党と政治的に対立していたことも一因であるが、シンガポールの華人企業は今日に至るまで「華人ネットワーク」を活用して着実にビジネスを拡大してきたのである。



写真 11 OCBC センターは立面がお金を象徴する「貝」の字になっている

ここでは 2 つの華人企業グループの事例を掘り下げて見ていきたい。

(ア) 旧・華聯銀行 (OUB) グループ

2001 年に大華銀行 (UOB) に吸収合併された旧・華聯銀行 (OUB) グループの発展の歩みには、シンガポールにおける華人企業家の創業の苦難と努力の軌跡が凝縮されている。

1906 年に中国広東省潮陽の知識人家庭に生まれた創業者の連瀛州 (リエン・インチョー) は、10 歳で両親を失い孤児となった。12 歳の時に単身で香港に渡り、14 歳でシンガポールに到着した際には一文無しであったが、同郷の鄭如璋の紹介で同郷者の船に雑貨を供給する店に住み込みで熱心に働いた。1929 年には 23 歳で華興公司を設立して

⁵³ 1932 年 (母体となった銀行は 1919 年設立) に福建幫の三行合併で設立。国内最大手の政府系 DBS 銀行に次ぐ第 2 位行で、戦前期にゴム事業で財をなした李光前 (リー・コンチェン) 一族のグループ。戦後は保険、清涼飲料水、食品等のイギリス系有力企業を買収して巨大企業グループとなった。他にも戦前に形成されたリー一族所有のゴム関連の巨大企業グループを持ち、二つを合わせると東南アジア有数の企業グループとなる。華人企業は同族企業が多いが、OCBC は早くから経営と所有の分離を進めており、創業一族は経営トップから外れている。

⁵⁴ 1935 年に福建幫メンバーが設立。工業化時代に不動産業やホテル等に事業を拡大して発展。シンガポールの三大銀行で資産規模は最少だが、東南アジア地域の支店・駐在員事務所は DBS、OCBC を上回っており、東南アジアに密着した戦略が特徴。2001 年には潮州幫の華聯銀行 (OUB) を吸収合併した。黄祖耀 (ウィー・チョーヨー) 一族が所有。

⁵⁵ 中国福建省同安から移民した郭芳楓 (クエック・ホンブン) ら 4 兄弟が 1941 年に設立。OCBC と UOB が銀行グループであるのに対し、セメントや建設など軽工業を中心に、戦後の工業化とともに発展、マレーシアでも工業化の波に乗って巨大企業グループを形成した。

輸出入貿易と海運代理業で頭角を現し、1937年には創業10年足らずで同郷の潮州会館の主席となった。さらに、4年後の1941年には史上最年少の34歳で中華総商会の会長に就任した。

第二次世界大戦時には中国・重慶に亡命を余儀なくされたが、現地で銀行を設立しただけでなく、国民政府の華僑総代にも就任した。戦後は1946年に中華総商会会長に復帰し、1949年には42歳で華聯銀行を設立するなど、血縁・地縁・業縁の三縁による華人ネットワークを活用して事業を拡大していった。

連瀛州が華聯銀行を設立した際、出資者には自身と同じ潮州系の李偉南のほか、福建系の陳六使（福建会館会長、南洋大学の創立者）、広東系の陸運涛（映画界のドン、父親の陸佑はクアラルンプールの土地を半分保有した立志伝中の人物）、客家系の胡文虎（タイガーバームの発明者）らがいた。連瀛州の狙いは、各幫の億万長者であり、ドンである人々を華聯銀行の発起人兼出資者とすることにあつた。

さらに、ペナン中華総商会会長の林連登、イポー中華総商会会長の劉伯群、マラッカ政商の大物・陳禎祿（マレーシア初代財務大臣）、ジョホールの張愈昌、ポート・カラングの謝文豊、バダヴィア（ジャカルタ）の黄光宝らも発起人兼出資者となった。

上記のように、シンガポール、マラヤ、ジャカルタの各地域から、そうそうたる顔ぶれの大家華人企業家を揃え、200万ドルの資金を調達した。その後も、1952年に潮州幫の総代である義安公司会長に就任、1977年には3年をかけて説得した公認会計士、HDB（住宅開発庁）総裁で同郷者でもある李喜盛を取締役兼頭取として招聘するなど、華人ネットワークを駆使して、華聯銀行（OUB）グループをつくり上げた。連瀛州の例を見ると、華人ネットワークは血縁、地縁、業縁など様々な縦糸、横糸が織りなす巨大な織物のようなものであることがわかる。

（イ）大華銀行（UOB）グループ

シンガポール独立から現在に至るまで、シンガポールの華人社会において、大きな存在感を発揮している華人企業家のひとりとして、大華銀行（UOB）グループ中興の祖で荣誉主席兼顧問の黄祖耀（ウィー・チョーヨー）が挙げられる。

1958年、父の黄慶昌が設立した大華銀行に入り、29歳の若さで銀行幹部を務め、1974年には父の跡を継いで主席となった。その間に大華銀行は倉庫業や不動産業に参入し、シンガポールとマレーシアで華人系銀行を次々と買収、合併して急速に発展した。2001年には当時のシンガポール四大銀行の一つであった華聯銀行（OUB）も吸収合併した。当初は政府系のDBS銀行が華聯銀行に敵対的買収を仕掛けたものの、最終的に大華銀行による吸収合併が決まったのは、大華銀行の黄祖耀と華聯銀行の連瀛州の両華人企業家のネットワークが働いたと言われている。このようにビジネスで大きな成功を収めた黄祖耀であるが、ここでは同氏の社会貢献活動に注目してみたい。

1972年、黄祖耀は福建会館主席となり、1977年には「福建基金」⁵⁶を設立。同基金

⁵⁶ 「福建基金」についての詳細は、以下を参照：

は自然災害発生時の人道援助、医療援助や医科学研究、大学や福建会館付属の5つの学校に対する奨学金や助学金、福建会館文学賞、コミュニティー活動への援助等に活用されている。

1985年、黄祖耀が中心となって、各会館の代表と共に、華人会館を統括するための全国的組織である「新加坡宗郷会館聯合總會」を設立する方針を打ち出した。黄祖耀は政府の積極的な支持も受けて翌1986年に設立された總會の初代主席に就任し、当時衰退していた華人会館の活性化のため尽力した。

1995年には、大華銀行グループの創設60周年を記念して、1,000万シンガポールドルを教育機構、公益団体、華人会館等を含む70余りの団体に寄付（うち200万マレーシア・リングギットはマレーシアの民会団体に寄付）した。大華銀行グループはシンガポール建国以来初の一度に最多の慈善的献金を行ったグループ企業として知られている。黄祖耀は、新加坡宗郷会館聯合總會が管轄する研究機関「華裔館」設立にあたって、個人名義で100万シンガポールドル、大華銀行名義で25万シンガポールドルの寄付を行っている。

他にも、低収入の華人青年の技能訓練、学習能力の低い華人学生のための補習を目的として設立された民間自助団体である「華社自助理事会」⁵⁷の信託委員会および寄付委員会の主席を務めたほか、父親名義にて100万シンガポールドルを同会に寄付している。また、華社自助理事会と同様の目的で設立された「インド人発展協会」および「マレー人・イスラム発展理事会」に対しても、それぞれ10万シンガポールドルの寄付を5年間に分けて行っている。

現代シンガポールの華人企業家たちは、黄祖耀のように学校、各種機関、地域コミュニティーへの寄付、活動への支援等を行い、華人社会のみならず、民族の分け隔てなくシンガポール社会に貢献しようとする者も少なくない⁵⁸。自己犠牲的精神は陳嘉庚（タン・カーキー）、陳六使（タン・ラクサイ）、李光前（リー・コンチェン）らの往年の華人企業家には及ばないという声も聞かれるが、企業や華人会館のリーダーとして華

http://www.thehokkienfoundation.com.sg/ch_index.html（最終アクセス2016年2月24日）

⁵⁷ 1992年に新加坡宗郷会館聯合總會および新加坡中華総商会によって設立。

「華社自助理事会」についての詳細は、以下を参照：<http://www.cdac.org.sg/>（最終アクセス2016年2月24日）

⁵⁸ 和美グループ主席兼総裁の蔡天宝は、中華総商会の名誉会長、通商中国の主席、華社自助理事会信託委員会の主席、宗郷總會の会長、福建会館の会長として、華人社会での存在感も大きい。フォーブスによるとシンガポールにおける億万長者26人のひとりで、近年は1,000万シンガポールドル以上をシンガポール国立大学、南洋理工大學、シンガポール経営大學に寄付している。2014年には最高位の国家勲章「ナショナル・デー・アワード」を受賞。華人社会リーダーとしては、2011年に受賞した黄祖耀に次いで二人目となった。

Leong Weng Kam. (2014, August 9). Chinese community leader Chua Thian Poh tops list of National Day Award winners. The Straits Times. Retrieved on August 9, 2014, from

<http://www.straitstimes.com/singapore/chinese-community-leader-chua-thian-poh-tops-list-of-national-day-award-winners>

人アイデンティティを有しながらも、シンガポール人としてこの国の社会全体に貢献しようという、シンガポール華人の意識の変化も現れているのではないだろうか⁵⁹。



写真 12 One Raffles Place (旧・OUB センター) (中央左側)とUOB プラザ (中央右側)がシンガポール最高層 (2016 年3月現在)の 280m で並んでいる。「2」と「8」は風水で好まれる数字でもある。

(2) 華人会館の国際化と国際的な華人ネットワークの構築

従来から、華人会館は海外の地縁・血縁組織とのネットワーク構築に大きな役割を果たしていた。例えば、1990 年代後半まで華人が表立って地縁・血縁団体を組織することができなかったインドネシアでは、現地の華人企業家たちがシンガポールの華人会館のメンバーになり、シンガポールの華人会館を通して、世界の同郷人たちとネットワークを築いていた。1980 年代から 1990 年代にかけてインドネシアで活躍していた華人企業家の林紹良、陳子興は、ともに「新加坡福清会館」および「世界福清同郷聯誼会」の名誉会員となり、シンガポールにある福清会館を通して、国内外の同郷者との関係を強めていた。同じく、インドネシア華人企業家でシンガポールの永住権を持つ唐裕は、「新加坡安溪会館」の主席を長年務めており、同様に中国の同郷者とも強い繋がりを持っていた。このような著名な華人企業家だけでなく、一般のインドネシア華人ビジネスマンも、シンガポールの華人会館の会員となって、海外華人とのビジネスの機会を得ていた者も多いという⁶⁰。

ア 世界規模の華人の大会・聯誼会

近年の華人会館の国際的活動の特徴は、それが単に国境を超えた活動というだけでなく、世界的規模の活動を展開しているということである。第二次世界大戦以前から華人

⁵⁹ ただし、長者番付にランクインする企業家でも社会貢献に関心の低い者もいる。当然、そのような企業家は華人社会における人望も低い。

⁶⁰ 合田 2009, p.109

の国際的活動は行われており、複数の国にまたがる組織も存在したが、ヨーロッパやアメリカ、東南アジアといった限定的な地域統合体であり、全世界を統合するかたちでの組織化はなされていなかった。それが、グローバル化、情報化社会の進行により、東南アジア各国のみならず、世界中の華人社会も影響を受け、単なる地域的な関係にとどまらず、世界規模での活動や組織が設立されるまでになった⁶¹。特に華人会館の国際的な組織は1980年代以降盛んに設立され、同時に「联谊会」等と呼ばれる大集会在世界各地で開催されるなど、国際的な活動も活発に行われるようになっていく⁶²。

図3-1 華人のおもな国際的団体

名称	種別	設立年	設立地点
世界龍岡親義総会	血縁	1963	香港
世界客属懇親大会	地縁	1971	香港
世界昭倫宗親総会	血縁	1973	香港
世界至徳宗親総会	血縁	1974	香港
世界梅氏宗親総会	血縁	1976	台湾
世界謝氏宗親総会	血縁	1977	サンフランシスコ
世界黄氏宗親総会	血縁	1978	台北
世界柯蔡宗親総会	血縁	1978	台北
世界伍氏宗親総会	血縁	1980	香港
国際潮団联谊会大会	地縁	1981	香港
世界頼羅傳宗親联谊会	血縁	1981	香港
世界林氏宗親総会	血縁	1981	台北
世界符氏宗親総会	血縁	1982	シンガポール
世界李氏宗親総会	血縁	1982	香港
世界許氏宗親総会	血縁	1982	台湾
世界越棉寮華人団体联合会	地縁	1983	台北
世界広西同郷联谊会	地縁	1983	シンガポール
世界関氏宗親懇親会	血縁	1984	香港
世界至孝篤親舜裔総会	血縁	1986	台湾
世界陳鰲山宗親懇親大会	地縁	1986	広東省
世界台湾同郷联谊会联合会	地縁	1988	アメリカ
世界福清同郷联谊会	地縁	1988	シンガポール

⁶¹ 市川 2000, p.11

⁶² 例えば、「世界晋江同郷総会」の設立は、シンガポールを中心とする東南アジアの華人会館の統合と拡大によって成し遂げられた。シンガポールとマレーシアの晋江会館によって開かれた「シンガポール・マレーシア晋江同郷联谊会」から、「アジア晋江社團联谊会」へ、さらに「世界晋江同郷総会」へと拡大発展した。

世界海南郷団聯誼会	地縁	1989	シンガポール
世界潘氏宗親聯誼大会	血縁	1989	シンガポール
世界福州十邑同郷総会	地縁	1990	シンガポール
山東省海外僑団聯誼会	地縁	1990	香港
世界烈山聯宗総会	血縁	1990	香港
世界壯巖宗親総会	血縁	1990	シンガポール
世界六桂懇親大会	血縁	1990	マニラ
世界顔氏宗親聯誼会	血縁	1991	シンガポール
世界龍岩郷団連絡中心	地縁	1991	不詳
世界安溪郷親聯誼会	地縁	1992	シンガポール
世界豊順同郷聯誼会	地縁	1992	シンガポール
世界東安懇親大会	地縁	1992	マレーシア
世界彭氏宗親聯誼会	血縁	1992	マレーシア
世界永春社団聯誼会	地縁	1993	福建省永定県
世界郭氏宗親団体聯誼会	血縁	1993	シンガポール
世界簫氏宗親懇親大会	血縁	1993	香港
世界晋江同郷聯誼大会	地縁	1993	シンガポール
世界同安聯誼会	地縁	1994	シンガポール
世界惠州同郷懇親大会	地縁	1994	シンガポール
世界何氏宗親懇親大会	血縁	1994	マレーシア
世界蘇氏宗親総会	血縁	1994	マニラ
世界広東同郷総会	地縁	不詳	台湾

(出所：市川 2000, pp.12-13 より作成)

聯誼会はシンガポールや香港など、華人が多く、地理的にも便利で、通信や事務的な面での機能を十分に果たせる国・地域の宗郷会館内に事務局を設置し、世界各国の宗郷会館によって持ち回り(多くが2年に1回)で大会を開催するものが多い。例えば、1990年成立の福州系華人による「世界福州十邑同郷総会」は、連絡事務所を新加坡福州会館内に設置しており、2年ごとに東南アジアを中心とした地域で開かれる聯誼会では、東南アジアだけではなく、香港、中国、台湾、日本、北米、ヨーロッパ、オセアニアなど、世界中の福州系華人が出席している。

血縁組織の場合は「林氏懇親大会」、「黄氏宗親総会」といった単独の氏姓によるものもあれば、「世界至孝篤親舜裔総会」のように陳、胡、袁、姚、虞、田、孫、陸、車、王の十姓からなるものもあり、東南アジアを中心として聯誼会が開催されている。

聯誼会のような世界規模団体の設立目的には多少の差異はあるが、世界各地の同郷出身者との相互扶助、商業関係の情報共有と連携したビジネス展開、原籍地の発展への貢献などは共通している。世界各国から集まった華人たちはこのような場を通して、貴重

なネットワークを築いている。

相互扶助の例では、1995年の阪神大震災や1999年の台湾大地震の際、世界各地の華人会館から両地の華人会館に対して多額の金銭援助があった。また、同郷人の子女の海外留学に際しての保証人引き受けや、就職斡旋も相互扶助の一例である。このような相互扶助の精神は、連綿と続く華人会館の伝統である。

注目すべきは、ビジネスチャンスの獲得という点である。聯誼会には世界中の著名華人企業家が、各地の華人会館を代表して出席し、地縁・血縁グループのネットワークをさらに強化している。シンガポールの華人会館の代表や華人企業家たちもあまねく聯誼会に参加して、華人の世界的なネットワークを築いている。聯誼会には、関連する華人会館の指導者層から一般会員まで誰もが参加できるが、こういった著名華人企業家と知り合うために、会館の会員になる若手ビジネスマンも多いという⁶³。

具体的なビジネス展開の例としては、1993年にシンガポールで開かれた世界広西同郷聯誼会第6回一次大会において、工作委員会主席の成立超が、世界広西同郷聯誼会の投資を募って持株会社を作り広西省でビジネス展開すると提案し、大会出席者の支持を得た。1995年には南寧経済技術開発区の不動産開発会社とシンガポール宏邦建設発展有限会社が共同出資し、南寧宏聯建設工程有限会社を設立した⁶⁴。また、「世界安溪郷親聯誼会」⁶⁵の場合は、1997年に第3回大会が開催された際、理事会は経済貿易の連携を強化するため、「世界安溪郷親聯誼ビル株式会社」の設立、取締役会の設置を決めた⁶⁶。このように、世界各地の同郷者たちは世界大会の機会を利用しては、会議の中で原籍地の発展について議論し、会議後には実際にビジネスを進めて世界的なビジネスネットワークを形成している。

ビジネス展開の場は必ずしも中国というわけではないが、中国地方政府の奨励や現地の経済発展が進むにつれて原籍地で聯誼会が開催されるようになり、多額のビジネス契約が結ばれている（世界泉州籍同郷聯誼会の例は図3-2参照）。

図3-2 原籍地で開催された世界泉州籍同郷聯誼会およびビジネス取引の概況

会議名称	年	開催地	契約プロジェクト数
第二回世界安溪郷親聯誼会	1994	安溪	19
第三回世界安溪郷親聯誼会	1997	安溪	36
第四回世界南安同郷聯誼会	1998	南安	28
第一回世界惠安同郷聯誼会	1999	惠安	56
第四回永春社団聯誼会	2000	永春	32
第六回世界安溪郷親聯誼会	2004	安溪	26

⁶³ 合田 2015, p.118

⁶⁴ 梁 2014, p.565

⁶⁵ 「世界安溪郷親聯誼会」は、新加坡安溪会館主席の唐裕によって提唱され、安溪会館創立70周年記念式典の際に設立が宣言された。

⁶⁶ 林 2014, p.528

第七回世界安溪郷親聯誼会	2008	安溪	12
--------------	------	----	----

(出所：林 2014, p.536 より作成)

近年、世界規模の聯誼会開催時には、シンガポールでは、リー・シェンロン首相ら政治家も出席して、積極的に聯誼会の発展を支援する姿勢を示している⁶⁷。また、マレーシア政府は、同国で聯誼会を開催することはマレーシアの風景や食などの観光資源を世界各地の華人に紹介する機会になると同時に、国内観光業の発展にも繋がるとして、国際大会出席者の人数に応じて補助金を提供している⁶⁸。このように、各国政府の支援を受けているのも聯誼会の特筆すべき点である。

聯誼会のようなネットワークは、政府、ましてや個人では構築できないものであり、華人会館があってこそ可能となる。歴史的に見ても、シンガポールの華人会館は、このような国際的ネットワークの構築を得意としていると言えるだろう。

イ 世界中の中華総商会による世界華商大会

華人の国際的ネットワークとしては、「世界華商大会」⁶⁹も注目される。この大会は、リー・クアンユー元首相の提唱で、1991年に新加坡中華総商会により組織されたもので、世界の華人企業と商工業界にビジネスチャンスを提供し、情報を共有することを目的としている。事務局は、新加坡中華総商会、香港中華総商会、泰国中華総商会の3つの中華総商会の持ち回りとなっており、第1回大会が1991年にシンガポールで開催されて以降、2007年には第9回大会が神戸で開催されるなど、2015年までに計13回開催された。

図3-3 世界華商大会の歩み

時 期	開催地	主要テーマ	参加者	参加国
第1回 1991年8月	シンガポール	華商の経済と文化についての交流	800	30
第2回 1993年11月	香港	世界経済発展の情勢と華商のネットワーク	1,000	22
第3回 1995年12月	タイ バンコク	世界の華商の連携を強め、経済発展と繁栄をめざそう	1,500	24
第4回 1997年8月	カナダ バンクーバー	電子通信および情報科学技術が世界市場に与える影響	1,300	26
第5回	オーストラリア	新しい千年への挑戦	600	30

⁶⁷ 最近の例では、2014年11月に開催された「第12回世界南安同郷聯誼懇親大会・新加坡南安会館成立88周年大会」にも、リー首相が出席している。

⁶⁸ 林 2014, p.527

⁶⁹ 「世界華商大会」についての詳細は、以下を参照：

<http://new.wcbs.com.sg/index.cfm?GPID=3> (最終アクセス 2016年2月24日)

1999年10月	メルボルン			
第6回 2001年9月	中国 江蘇省南京	新世紀における華商の連携による 世界の平和と繁栄への貢献、情報化 時代への新しい挑戦	5,000	70
第7回 2003年7月	マレーシア クアラルンプール	グローバル化における世界企業の 共存共栄	3,300	20
第8回 2005年10月	韓国 ソウル	華商とともにある成長、地球村の平 和繁栄	2,500	28
第9回 2007年9月	日本 神戸	ウィン・ウィンによって世界に恩恵 をおよぼそう	3,600	33
第10回 2009年11月	フィリピン マニラ	華商同士の連携を強め、世界繁栄を 促進	3,000	22
第11回 2011年10月	シンガポール	新局面、新華商、新動力	4,000	32
第12回 2013年8月	中国 四川省成都	中国の発展、華商のチャンス	3,000	105
第13回 2015年9月	インドネシア バリ	華商が集まり、共にインドネシアで 勝利しよう	3,000	40

(出所：崔 2014, p.104 および第 13 回大会のホームページ等から作成)

第 1 回世界華商大会でリー・クアンユー元首相が行った「有効なネットワーク」という設立基調演説での提案により、1995 年には新加坡中華総商會が中国語と英語による「世界華商ネットワーク（世界華商網絡）」⁷⁰というサイトを立ち上げた。同サイトには 120 を超える国と地域の華人企業データが掲載されており、会員であれば華人企業に限らず誰でもアクセスすることができる。

世界華商大会について、顔尚強氏は「世界華商大会の成立は、リー・クアンユー元首相の先見性というよりも、華人の行動様式の一つと考えるのが相応しいのではないだろうか」と、同大会は華人のネットワーク本能に合致しており、今後もさらに拡大していくと指摘している⁷¹。

⁷⁰ 主な内容は、(1) 華人企業—サイト上で会員に情報を提供するため、また企業間の業務を繋げるため、世界に分散している華商企業のメールアドレスおよびホームページ URL を含む資料の収集、(2) 華人商工団体—世界各地の主要な華人商工団体の資料の収集、(3) グローバルなビジネスチャンス—華商企業に限らず、世界各国・地域の商工業への問合せリストの提示、である。「世界華商ネットワーク」についての詳細は、以下を参照：
<http://www.wcbs.com.sg/> (最終アクセス 2016 年 2 月 24 日)

⁷¹ 顔 2009, p.121

(3) 中国および中国新移民との関係強化

近年のシンガポールにおいては、中国や中国新移民との関係強化により、華人ネットワークが新たな局面を迎えている。

1990年代以降、華人会館と中国の間では、ビジネスや人的交流を目的とした交流団や視察団等による交流が盛んになった。例えば、2005年には安溪会館の商業視察団150人が安溪での親戚訪問と墓参りの後、現地で商談を行った⁷²。このようなビジネスに関連するものだけでなく、本章第1節で取り上げた中山会館のように青年団の交流事例も多い。また、2009年にはAPEC（アジア太平洋経済協力会議）でシンガポールを訪れた中国の胡錦濤国家主席（当時）が新加坡宗郷会館聯合總會に「正式に」招待された。これ以前には、李鵬元首相が旧知の華人会館主席から会館関連のイベントに招待された事例もあるが、公的なものではなく、会館が私的に招待したものであった⁷³。

さらには、文教分野での中国との関係も深まっており、宗郷總會は2011年から毎年5名の優秀な学生の北京大学、精華大学、復旦大学等の中国トップレベル大学への進学に際して、年間で最大1万5,000シンガポールドルの支援を4年間提供している。

このように中国との関係が深まるにつれて、シンガポールでは中国からの新移民が急増しており、次章で述べるように社会に大きな影響を与えている。

⁷² 林 2014, p.535

⁷³ 合田 2015, p.116

第4章 中国系新移民と中国新移民社団

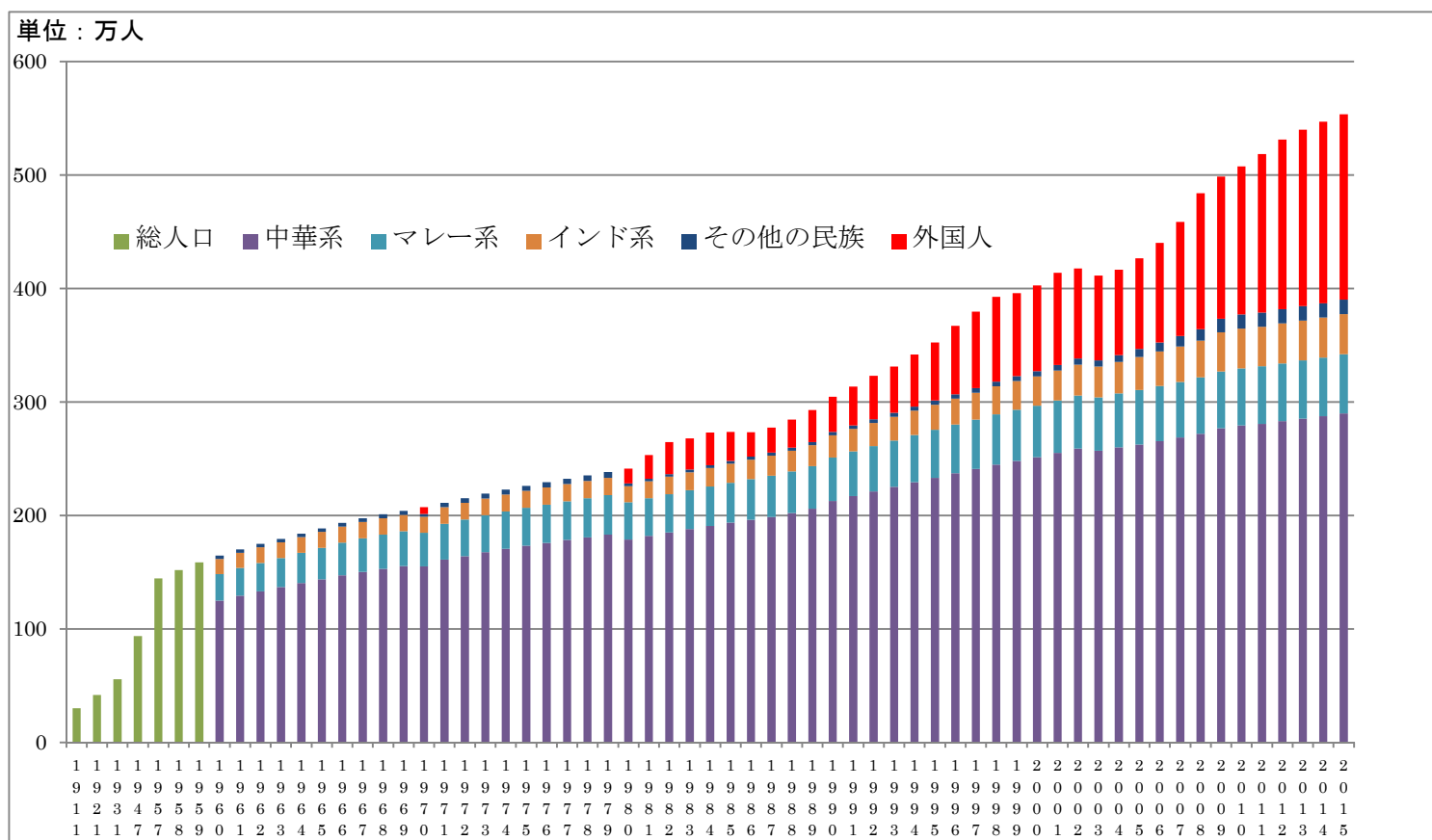
本章では、主に劉文正氏の叙述に従って、中国新移民と彼らによって組織された中国新移民社団について取り上げたい⁷⁴。

第1節 中国新移民の増加と中国新移民社団設立の背景

新移民が増加した背景にはシンガポールの少子化も関係している。シンガポールの合計特殊出生率は2014年で1.25と日本の1.42を下回る世界最低水準となっている。特に、マレー系の1.73に対して、多数派の中華系は1.13（インド系も1.13）と非常に低くなっており⁷⁵、女性の社会進出が進む一方で、キャリアを重視する女性が結婚を回避したり、子供を産まなくなったりしている。

このような国民人口の停滞の埋め合わせとして、外国人材の積極的な受け入れが行われてきた。外国人材に関するデータは1980年以降から（1979年以前は1970年のみ）確認できるが、図4-1を見るとわかるように、2015年時点では総人口の約30%を占めるまで急増している⁷⁶。

図4-1 シンガポール総人口の推移 (出所: Department of Statistics Singapore ホームページから作成)



⁷⁴ 劉 2014, pp.337-372 を参照。

⁷⁵ 数値はシンガポール統計局『Population Trends 2015』より引用。

⁷⁶ 数値はシンガポール統計局『Population Trends 2015』より引用。

シンガポールの経済発展を維持するために、政府は専門技能を持った有能な外国人から単純労働者まで外国人労働者を継続的に受け入れている。1980年代末からは民族構成比への配慮から、香港人、中国人、各国の華人系住民の移住を奨励し始めた。東南アジアで唯一、華人の割合が人口の多数を占めるシンガポールの経済的成功や、華人の政治、経済、ほか各方面での指導的地位は、多くの華人系新移民をひきつけてきた。

華人系新移民は出身地によって大まかに中国新移民、香港新移民、台湾新移民の3つに分けることができる。シンガポール政府は新移民の出身国等を公表していないが、香港や台湾からの新移民よりも中国新移民が圧倒的に多いと言われている。公式統計が存在しないため、新移民人口については学界での見解も統一されていないが、庄国土氏の研究チームによると、2011年時点でシンガポールにおける中国人移民数はおよそ50万人から60万人にのぼり、職種構成は、留学生、専門家、職員、商人および労働者などであるという⁷⁷。現在、中国人のシンガポールへの国際移動は、コン・リーに代表される女優、卓球等スポーツ選手など幅広く拡大している。

1990年に中国と国交を樹立し、両国間の経済交流や文化交流が活発になると同時に、中国の出国政策の改定によって中国からの新移民の数が急増した。新華網の報道によれば、2007年のシンガポールにおける中国人留学生は合計3.3万人にのぼり、公立大学・ポリテクニク、公立小中学校、各種私立学校にそれぞれ1万人余りが在籍中とされている⁷⁸。また、中国商務部の統計によると、2002年時点で大陸からシンガポールに送り出された各業種の労働者数は延べ20万人以上にのぼり、2009年末には約8万3,700人の中国人労働者がシンガポールで働いている⁷⁹。このような留学生や労働者の相当数がシンガポールに残り、中国新移民の大部分を構成していると見られている。

第2節 中国新移民とシンガポール社会との軋轢

中国新移民はシンガポールの人口安定、経済成長の継続に一定の役割を果たしてきたが、政府主導の急速な中国人流入に対し、国民の間にも摩擦の拡大や就業機会の喪失に対する不安が広がっている。国民の不安に対して、政府は自国経済と中国の経済成長をリンクさせ、経済発展や中国投資での優位性確保に活用するという戦略に国民の理解を求めてきた。また、シンガポールという小国の至上命題である経済成長の継続には労働力確保が必要であり、リー・クアンユー元首相も「われわれには若い移民が欠かせない。さもなくば、日本経済のようにわが国経済も減速し、活気を欠いたシンガポールになってしまう」と述べている。

しかし、中国新移民とシンガポールの華人との間には、教育背景、思想、価値観等の違いから一定の隔たりや衝突があり、両者の間で軋轢も生じている⁸⁰。

2011年、中国から移民したばかりの一家が、隣に住むインド人一家のカレーの臭い

⁷⁷ 劉 2014, p.337

⁷⁸ 劉 2014, p.338

⁷⁹ 劉 2014, p.338

⁸⁰ 本田 2013b, pp.126-129 を参照。

が耐えられないという苦情を政府の紛争処理機関に持ち込んだ結果、その新移民一家がいない時にだけインド人一家がカレーをつくることで決着が図られたと現地紙が報じた。この報道を受け、インターネット上では政府やシンガポールの文化を尊重しない中国新移民を非難するコメントが集中し、抗議のために多くの賛同者が同じ日にカレーを食べるイベントまで開催された。

2012年2月、シンガポール国立大学に通う中国人留学生が不愉快な思いをさせられたシンガポール人のことをフェイスブック上で「犬」と表現したことが問題となった。この留学生が奨学金を得ていたことから、外国人が地元大学生よりも優遇されているとのこれまでの不満も重なって、インターネット上では新移民に対する批判的な書き込みが相次いだ。

さらに、2012年5月に発生したフェラーリ暴走事件はシンガポール社会に大きな衝撃を与えた。この事件は、31歳の中国国籍の男性実業家が運転するフェラーリが交通規制を無視して街中を暴走したあげくタクシーと衝突、本人や巻き込まれたタクシー運転手と乗客の日本人女性が死亡した、というものであった。地元の慣習や法律を尊重しない中国人に対してこれまで以上に批判が噴出したことから、中国大使館が遺憾の意を表明し、死亡した中国人男性の妻が謝罪の声明を発表するという異例の事態となった。

新移民に対する国民の不満や反発が高まるたびに、政府は国の継続的な発展のためには移民が必要だと訴えてきたが、外国人移民が主要争点となった2011年5月の総選挙では与党・人民行動党の得票率は史上最低となった。また、2012、2013年の2回の補欠選挙でも人民行動党が敗北、さらには2013年1月に発表された外国人の積極的な受け入れを前提とする人口白書に対して、シンガポールではきわめてまれな大規模抗議集会が開催されるなど、外国人受入政策は国民にとって非常に大きな関心事となっており、政府も難しい舵取りを迫られている。

中国新移民とシンガポール華人との間では民族性や文化的・歴史的伝統を共有している。しかし、シンガポール人歌手のディック・リーが、外見は黄色（アジア人）だが皮をむけば白い（生活様式は欧米流）「バナナ」と自らを呼んでいるように、第2、第3世代と代を重ねるにつれ、シンガポール華人のアイデンティティーは、祖先の地である中国ではなく、既にシンガポールとなっている。英語教育を受け、欧米の影響を強く受けた若い世代の華人には、国民の雇用機会喪失、不動産価格の高騰、公共交通機関の混雑、マナーの悪さなど、新移民に対して抵抗感を持つ者も少なくない。

一方で、シンガポールに来たばかりの中国新移民は、生活、勉学、仕事等の面で様々な困難に直面するが、伝統的な華人会館からの中国新移民への支援は限られていた。このような状況下にあって、中国新移民の困難の軽減、コミュニケーションや協力の強化、さらにはシンガポール社会にスムーズに溶け込むための組織として、中国新移民団体が結成されてきた。

第3節 中国新移民社団の概要

中国新移民は国交樹立後の1990年代から急増し、1990年代半ば頃からは中国新移民社団が相次いで設立された。香港と台湾の新移民社団は1990年代初期から設立されているが、現在では中国新移民社団の数が香港、台湾のそれよりも遥かに多くなっている。劉文正氏はシンガポールにおける中国新移民社団を以下の4種類に分類している⁸¹。

1 総合型社団

2001年、王泉成⁸²によって設立された「新加坡華源会」は、設立当初、シンガポール政府や駐シンガポール中国大使館と親密な関係を持ち、多大な協力を得た。設立から数年間で急速な発展を遂げ、現在は会員数6,000人以上で中国新移民社団の最大の組織となっている⁸³。華源会は地縁や血縁といった範疇にとらわれない中国各地の出身者による組織で、教育、法律、医療健康、芸術、科学技術など多方面の専門家を多数擁している。

1996年、シンガポール初の中国新移民社団である「新加坡天府会(旧・天府同郷会)」が四川省出身の新移民たちによって設立された。現在は社団名から「同郷」を削除し、四川省以外の中国各地からの新移民も加え、理事・会員を合わせて約2,300人という規模に達している⁸⁴。天府会は専門家や高学歴者が多いことも特徴の一つとなっている。

2 地域型同郷社団

「新加坡天津会」は、12人の天津市出身者と天津の大学を卒業した新移民により、2008年3月に設立された。現在、主に経営者や専門家など100人以上が入会している。

2012年には、貴州省出身の新移民たちが「新加坡貴州同郷会」⁸⁵を設立している。

3 大学同窓会

改革開放後、中国の名門大学出身者は常に海外留学の主力であり、卒業後は多くの留学生在が海外に残り、シンガポールは最も重要な集合地域となっている。そのほか、若い時に中国の大学で勉強し、または就職してから、改革開放後に様々な理由でシンガポールに移住した専門家も多く存在する。このため、シンガポールの中国新移民の中には中国名門校の出身者が多く、近年は大学ごとに同窓会組織を設立している。

⁸¹ 劉 2014, pp.343-345

⁸² 本籍は福建省安溪県魁斗鎮蓬庭村で、1987年に19歳でシンガポールに渡り、建設業者として成功を収めた。

⁸³ 「新加坡華源会」についての詳細は、以下を参照：

<http://huayuanhui.org/Home/Members#> (最終アクセス 2016年2月24日)

⁸⁴ 「新加坡天府会」についての詳細は、以下を参照：<http://www.tianfu.org.sg/about.html> (最終アクセス 2016年2月24日)

⁸⁵ 「新加坡貴州同郷会」についての詳細は、以下を参照：」<http://www.guizhou.org.sg/> (最終アクセス 2016年2月24日)

シンガポール内務省に正式に登録している影響力の大きい同窓会には、「上海交通大学新加坡校友会」、「北京大学新加坡校友会」、「中国科学技術大学新加坡校友会」、「新加坡清華大学校友会」、「同済大学新加坡校友会」等がある。なかでも新加坡清華大学校友会は、2008年5月末時点における正会員が154人おり、300人の同窓生と連絡を取っている。

4 中国人留学生や専門家たちによる社団

「華新社団」はシンガポールに在住の中国人留学生や専門家たちで結成された社団であり、2005年7月末にシンガポール社団登録局に許可された。その前身はシンガポールで勉学に励む中国人留学生が2002年2月に開設した開放式ネットフォーラムである。このネットフォーラムは開設された当初からオンラインと実生活を繋げることに力を入れ、中国人留学生の生活、学習、就職のために様々なカウンセリングや支援を提供してきた。

図4-2 シンガポールにおける主要な中国新移民社団

名称	種別	設立年	おもな会員構成
新加坡天府会	総合型	1996	四川省を中心とする中国各地からの新移民
上海交通大学新加坡校友会	同窓会	1999	上海交通大学同窓生
新加坡華源会	総合型	2001	中国各地からの新移民
北京大学新加坡校友会	同窓会	2004	北京大学同窓生
中国科学技術大学新加坡校友会	同窓会	2004	中国科学技術大学同窓生
華新社団	留学生・専門家	2005	中国からの留学生と専門家
新加坡清華大学校友会	同窓会	2007	清華大学同窓生
新加坡天津会	地域型	2008	天津からの新移民
同済大学新加坡校友会	同窓会	2008	同済大学同窓生
天津大学新加坡校友会	同窓会	2010	天津大学の学友
吉林大学新加坡校友会	同窓会	2010	吉林大学同窓生
華中科技大学新加坡校友会	同窓会	2011	華中科技大学同窓生
新加坡貴州同郷会	地域型	2012	貴州省からの新移民

(出所：劉 2014, p.341 および各社団のホームページ等から作成)

第4節 中国新移民社団の趣旨と財源

前節で取り上げたような中国新移民社団の社団趣旨（組織の設立や活動の主な目的）には多少の差異はあるものの、以下の4点が共通している。

- (1) 会員相互の交流と協力を促進すること。

- (2) 多彩なイベントまたは活動を開催し、会員の福利を向上させ、会員の学習、レジャー、娯楽上のニーズを満たすこと。
- (3) 地域社会に奉仕・貢献し、シンガポールという多文化社会に溶け込むための支援を行うこと。
- (4) シンガポールと中国との間の交流や友情を促すこと。

このうち、(1) や (2) は当然の内容であるが、(3) は各社団がシンガポール社会に認められるための重要な要素であり、(4) については、ほとんどが初代移民である中国新移民の「故郷を懐かしむ心」表れていると指摘されている⁸⁶。

また、劉文正氏によれば、社団によってその比重は異なるが、中国新移民社団の財源には以下の4種類がある⁸⁷。

まず、社団会員が納めた会費が挙げられる。多くの入会を促すには会費をあまり高く設定できないため、会費が社団の収入に占める比重はそれほど高いものではなく、ほとんどの社団は別の財源を確保する必要がある。

次に、寄付金(会員または社会一般からの寄付)やイベント収入がある。例えば、2008年5月の四川大地震の際、天府会は積極的に会員や社会一般に寄付を呼び掛け、20.08万シンガポールドルの募金を集めた。また、華源会の芸術団は同済病院のためにチャリティー公演を行い、12万シンガポールドルの科学研究費の募金を獲得している。

3つ目は、法律が認める範囲内で社団が従事した一定の経営収入である。華源会は財源を確保するために基金を設立しているほか、華新社団は「華新中文網」⁸⁸に多くの商業広告を掲載して収入を確保している。

4つ目に中国政府からの資金援助がある。中国新移民社団がコンサートや中国文化展示会などのイベントを開催するにあたって、道具・衣装・展示品などをサポートしているほか、新移民社団の幹部が帰郷した際には中国各地方政府の関係部署が相応の対応をしている。ただし、全体的には財源に占める比重は低く、資金援助の詳細は基本的に非公開となっている。

第5節 中国新移民社団の役割

中国新移民社団の役割をまとめると、大きく分けて次の3つが挙げられる。

1 中国新移民同士の交流、相互扶助

新しい環境であるシンガポールにおいて、生活、勉学、仕事等で多くの困難に直面する中国新移民のために、中国新移民社団は様々なイベントを開催して交流や相互扶助の機会を提供している。

普段から遠足、食事会、カラオケといった交流イベントが開催されているほか、正月

⁸⁶ 劉 2014, pp.345-348

⁸⁷ 劉 2014, pp.351-354

⁸⁸ 「華新中文網」についての詳細は、以下を参照：<http://www.huasing.org/main.htm> (最終アクセス 2016年2月24日)

や祝祭日には比較的規模の大きなパーティー、お茶会、食事会等が企画されている。例えば華源会は「中秋を祝う会」、「新年パーティー」等の親睦イベントを開催している。

また、多種多様のセミナー等を開催し、生活上の問題を解決するための各種情報を提供している。華新社の華新中文網はシンガポールで生活・就職するための様々な情報を大量に提供しており、白血病を患った中国人留学生を支援するための募金呼び掛けも行った。

さらに、新移民の子供たちに奨学金を提供し、会員向けに各種スポーツイベント等も開催している。華源会をはじめ、多くの社は学業や人格に優れた会員の子どもたちに奨学金を与えている。また、華源会の囲碁チームは第5回シンガポール囲碁リーグ戦で優勝している。

2 中国新移民とシンガポール社会との架け橋

重要な役割のもう一つは、新移民とシンガポール社会との関係を円滑にし、新移民のシンガポール社会に対する理解を深め、新移民がシンガポール社会に溶け込めるように支援することである。

華源会は「シンガポール川の歴史ツアー」、「シンガポール教育講座」、「シンガポール建国記念パーティー」を開催したほか、会員向けに移民政策、就職、生活など各方面の無料コンサルティングを行った。また、人民協会と協力して新移民が現地社会へ溶け込むように力を尽くしてきた。華新社は毎年、シンガポール国立大学中国留学生会とともに『新入生パンフレット』を編集して新しい中国人留学生に配り、シンガポールでの勉学や生活に馴染めるように指導している。

他方では、シンガポール社会全体に中国新移民のことをよく知ってもらい、誤解をなくし、新移民を受け入れてもらえるように働きかけることも重要であり、華源会の芸術団は学校等のために数多くのコンサートを開催している。

このような中国新移民社の活動を踏まえて、リー・シェンロン首相が華源会設立1周年祝賀会の挨拶の中で、華源会が他の華人会館や民族と協力し、多民族が調和するシンガポール社会を理解するための努力を継続していることを称えて、「華源会のような組織は、シンガポールの早期の華人会館と同じく、我が国できわめて重要な役割を果たしている」と述べていることから、劉文正氏は、中国新移民社による中国新移民とシンガポール社会との関係円滑化の取組みが政府からも高く評価されていると指摘している⁸⁹。

3 中国文化の伝承、中国との経済文化交流の推進

中国新移民はほとんどが移民一代目であり、中国文化に対して強い帰属意識を有していることから、中国文化の伝承や中国との経済文化交流の推進に重要な役割を果たしている。

⁸⁹ 劉 2014, pp.356-358

中国文化伝承に関する活動として、華源会はシンガポール最大の日刊華字紙・聯合早報などと「第4回華語スピーチコンクール」を共催、「孔子思想と現代社会」、「中国文化の生死観」等のシリーズ講座や青少年のための「快樂華文キャンプ」などのイベントを開催した。また、新加坡清華大学校友会は、武術・太極拳教室を開催したほか、中国の歴史文化を理解し、中国語への興味を培い、中国語の読解・作文・コミュニケーション能力を高めることを目的として、海外に住む清華大学同窓生の子女向けにサマーキャンプ等の活動を行った。

中国とシンガポールの人的交流推進においても、新移民社团は積極的に活動している。華源会は2001年の設立以降、シンガポールを訪問した泉州・浙江・重慶・アモイ・鉄嶺・南昌等の中国の省・市の代表団や文化交流のために訪れた中国の芸術団体や学者を数多く受け入れた。逆に華源会も団体で帰国しており、2005年には江西省での海外華僑中青年優秀者「華夏行」というイベントに参加、2007年6月にも青海省、チベット自治区を視察しているほか、僑務関係部署が主催する華人社団懇親大会や海外僑団青年幹部研修会等にも参加している。中国各大学のシンガポール校友会も中国側の訪問者、特に同窓生の対応において重要な役割を果たしており、中国科学技術大学新加坡校友会は2007年11月に同窓生でもある蘇州市長が訪問した際に歓待している。

また、前章で述べた中国とシンガポールとの経済交流の拡大局面において、中国新移民社团も重要な役割を果たしている。中国とシンガポールとのビジネス交流促進を趣旨の一つとしている華源会は、2001年から相次いで両国が主催した「寧波商業貿易交流会」、「寧波経済考察団」、「昆明輸出商品見本市」、「汕頭東盟商品展」、「世界華商大会」など多くのビジネス交流イベントに参加している。会長の王泉成自身も故郷の福建省安溪県にホテルを建設するなど、中国へ投資して会社を数社設立している。

他にも、天府会は四川大地震の被災地に寄付金を贈り、華源会会長の王泉成も校舎の建設、教育基金や高齢者活動センターの設立等で長期にわたって故郷の公益事業に貢献している。

第5章 華人会館と中国新移民社団との相違および交流

前章で中国新移民と中国新移民社団について概観したが、本章では華人会館と中国新移民社団の相違点と双方の交流について、主に劉文正氏と合田美穂氏の叙述に従ってまとめたい⁹⁰。

第1節 華人会館と中国新移民社団との相違

華人会館の大部分はイギリス植民地時代に設立されており、ラッフルズ上陸と同じ1819年設立の曹家館から始まる華人会館の歴史は200年近く、100年以上の歴史を持つ華人会館も多く存在している。一方、中国新移民社団は1990年代半ば以降に結成されたもので歴史が浅い。したがって、次のように大きな違いが存在している。

まず、経済力の面で大差がある。シンガポール最大規模の福建会館は8階建ての近代的な商業ビルを所有し、雲南園実業私営有限公司を経営しており、天福宮（シアン・ホッケン寺院）をはじめ4つの廟を運営している。中国新移民社団の場合は大部分が特定の会所を持っておらず、会議やイベントを行う際は会社や他の場所をレンタルするケースが多く、活動経費も限られている。

次に、シンガポールや原籍地への関心度が異なる。先に述べたように、華人会館では長い歴史を経てシンガポール社会を志向した現地化が進み、シンガポールへの関心度が原籍地への関心を遥かに上回るのに対して、中国新移民社団では両者への関心度は同レベルにとどまる。

さらに、国際的な華人ネットワークとの連携度や影響力が大きく異なっている。シンガポールの華人会館は聯誼会の事務局が多く置かれていることなどから、世界規模の華人ネットワークの中核となっているが、中国新移民社団はこのようなネットワークとの連携はまだ少なく、影響力も遠く及ばない。

そして、華人会館には最高統轄機関が存在するが、中国新移民社団にはそれに相当する機関はない。中華総商会は1986年の新加坡宗郷会館聯合總會成立以前、現地の華人企業家・企業の実質上の最高統轄機関となっていた。1986年以降は中華総商会と宗郷總會が肩を並べて華人会館の最高統轄機関となっている。一方、中国新移民社団には統一した最高統轄機関がなく、華源会や天府会などが宗郷總會の会員団体に、上海交通大学新加坡校友会などが準会員団体となっている⁹¹。また、中国新移民社団には経済力と厚い人望を持ち合わせたリーダーがまだ少数であり、社団間の連携も不十分である。

第2節 華人会館と中国新移民社団との交流

華人会館と中国新移民社団には大きな相違点はあるものの、人的交流や各種イベントでの相互交流は徐々に進んでいる。

⁹⁰ 劉 2014, pp.362-367; 合田 2015, pp.116-117 を参照。

⁹¹ 「新加坡宗郷会館聯合總會」<http://www.sfcca.sg/member/home>（最終アクセス 2016年2月24日）

1 人的交流

華人会館と中国新移民社団の人的交流は双方の連携において重要な接点となっている。華源会等の多くの中国新移民社団はシンガポールの人々に対してオープンであり、入会を歓迎している。また、しばしば華人会館のリーダーを社団の顧問役に迎え、社団へのアドバイスを求めている。一方、多くの華人会館も新移民の入会を認めている。その結果、多くの中国新移民は中国新移民社団の会員でありながら、華人会館の一員にもなっている。例えば、中華総商会は中国・香港・台湾・マレーシア等から華人新移民の入会を促すため、2007年に移民連絡部門を設置した。100年近い歴史を有する晋江会館は近年多くの新移民会員を獲得し、新移民を含む青年団のボランティア活動が評価されて2012年度の傑出会館賞を受賞している⁹²。

また、新移民の中でも重要なリーダーである王泉成は、中国新移民社団「新加坡華源会」の会長と華人会館「新加坡太原王氏公会」の副会長を兼任しているが、近年では華人会館の会長となる中国新移民も現れている。

2014年、「新加坡惠安公会」では福建省惠安県出身の孫礼鋒氏（59歳・男性）が中国新移民初の会長となった⁹³。1981年にシンガポールにやって来た孫会長は、会館からの支援を期待して惠安公会を訪ねたが、シンガポール国民ではなかったため追い返されてしまった。当時は失望したものの、建設労働者から身を立てて建設会社の社長となり、シンガポールに帰化した現在、孫会長は「新移民が華人社会に溶け込むには、会館に入会することが最善の方法だ」、「会館の継続と成功を確かなものにするためには、新旧の華人が互いに順応し協力しなければならない」と述べている。惠安公会は近年、シンガポールで就労、生活している惠安生まれの者であれば、シンガポール国民でなくても会員になれるように会の規定を改正している。

同様に、宗郷総会の役員にも新移民が増えている。2010年に中国新移民で初めて鐘声堅氏（現・副会長）が理事となってから⁹⁴、2015年には7人（香港新移民社団である九龍会の会長を含む）を数えるまでになっている⁹⁵。

このように、近年では中国新移民が各華人会館や宗郷総会の主導的地位に立つようになっており、中国新移民のシンガポール華人社会への統合が加速している。

⁹² 新加坡宗郷会館聯合總會 2013, pp.60-61

⁹³ Leong Weng Kam. (2014, August 18). Once rejected from joining it, Mr Sun Lai Fong is now president of the Singapore Hui Ann Association. The Straits Times. Retrieved on August 18, 2014, from <http://www.straitstimes.com/singapore/once-rejected-from-joining-it-mr-sun-lai-fong-is-now-president-of-the-singapore-hui-ann>

以下の惠安公会に関する記述も同記事より引用。

⁹⁴ 羅一峰 2015, p.6

⁹⁵ Leong Weng Kam. (2015, October 9). Chinese clan body gets more new immigrant leaders. The Straits Times. Retrieved on October 9, 2015, from <http://www.straitstimes.com/singapore/chinese-clan-body-gets-more-new-immigrant-leaders>

2 イベント等における交流

華人会館と中国新移民社団との交流は、イベント等においても多く見られるようになっている。例えば、宗郷総会は2007年から毎年8月の建国記念日に合わせて、シンガポール愛国の楽曲を歌う「愛国歌曲大家唱」を開催している。当初は、主にシンガポール人がこの活動に参加していたが、近年は新移民社団も招待されて参加している。2011年8月には、19の華人会館から代表およびパフォーマンス要員が派遣されたほか、中国新移民社団の天府会と天津会のメンバー等、合計400人近くが参加し、パフォーマンスを行っている。

また、宗郷総会は新移民社団に対してのみならず、新移民個人のために、「新移民とシンガポール社会シリーズ講座」と呼ばれる講座やイベント（例えば、「シンガポール社会との関わり方を紹介する講座」、「シンガポール華人社会の行事である中元節を紹介する講座」、「他民族を紹介する講座」、「華人会館の人々との交流会」など）を定期的に開催するようになっている。2013年10月に開催された「シンガポール人の集団潜在意識を読み取る講座」では、心理療法士である専門家によって、シンガポールの多民族国家という背景やシンガポール人の独特な思考についての紹介がなされた。2014年6月に開催された「シンガポール社会に溶け込むための講座」では、新移民が現地社会に溶け込むための方法、シンガポール人の新移民に対する見方などが、弁護士であり心理療法士でもある専門家によって解説された。中国新移民の多くは、シンガポールの言語環境だけでなく、英文教育を受けてきたシンガポール華人の思考やコミュニケーション方式に馴染みにくいとも言われており、このような企画で相互理解を促進することは非常に重要であろう。

宗郷総会だけでなく、各華人会館も新移民社団や新移民との交流イベントを開催している。2013年4月、福建会館が企画した「天福宮の見学会」には、150人の新移民が招待され、シンガポールに根付く中国の地方文化に触れた。また、同年7月に「新加坡岡州会館」が企画した「会館の文物展示会および地方劇の鑑賞会」には新移民を含む80人が招待されている。一方で、中国新移民社団の華源会もコンサート、芸術イベントや理事会就任式等の重要な活動を行う際には、華人会館リーダーや会員を招いており、天府会と「新加坡三江会館」が2007年の元宵節に「新旧移民新春交流会」を共催した際には、宗郷総会に所属する191の会館の会長が招待され、500人の新旧華人が一堂に会して親睦を深め、ネットワークの構築が図られた。

3 新旧華人組織の連携の意義

このような華人会館と中国新移民や中国新移民社団との交流拡大や関係強化には、シンガポール政府の後押しも関係している。2011年、宗郷総会と中華総商會が主催するイベントに出席したリー・クアンユー元首相は、「方言を話す若者が減っていく中で、シンガポールの華人会館、とりわけ方言グループに基づく同郷会館は、21世紀の時勢にかなうように変容しなければならない」、「宗郷総会と中華総商會はともに、将来の

役割について、あり方を見直さなければならない。同郷人や同姓の華人を支援するだけでなく、広東、福建、上海などから来た新移民がシンガポールで仕事をする際に必要とされる英語を掌握するために力を貸し、新移民が順調にシンガポールに溶け込めるように支援しなければならない」と述べている。

19世紀初めに開港して以来の移民社会であるシンガポールでは、世界中から集まって来た多様な人々の力がその発展の原動力となってきた。1990年代から急増した中国新移民とそれともなう中国新移民団体の設立は、シンガポールという移民社会の発展過程の延長であると言える。かつて中国から渡ってきた移民たちが華人会館を頼ったのと同様に、現代の中国新移民たちも中国新移民団体を頼る傾向がある。中国新移民団体は設立からの歴史は浅いものの、課題を抱えながら一定程度まで発展しており、シンガポールの華人社会において華人会館と共に重要な役割を担うようになっている。

これからの中国新移民団体は、中国新移民のシンガポール社会に対する理解を促進し、溶け込めるように支援する一方で、新移民のシンガポール社会への貢献意識を高めて、社会との積極的な関係を促す必要がある。同時にリー元首相の発言の通り、伝統的な華人会館が中国新移民や中国新移民団体との連携を強化して、新移民がシンガポール社会に溶け込めるよう積極的に支援することも、同じ現代シンガポール華人社会の構成員として華人ネットワークをさらに強化・拡大することに繋がっていく。

華人会館と中国新移民団体という新旧華人組織の連携強化は、台頭する中国とシンガポールとの経済方面を中心とした交流拡大にプラスとなるだけでなく、シンガポールの継続的な経済発展に不可欠な移民受け入れ政策の成功をも左右し、まさにシンガポールの国益に直結するものと言えるであろう。

おわりに

本稿においては、シンガポールの華人社会について、特に伝統的な華人会館と中国新移民社団を取り上げ、華人社会の現在までの歩みを振り返りながら、現状と今後の展望を概観してきた。

華人会館を中心とする旧来の華人コミュニティーは、シンガポールに根差した活動で現地化しつつ、各国の会館と連携して世界規模の活動を展開している。一方で、急増している中国新移民はシンガポール社会と軋轢を生じながらも、中国新移民社団を組織し、現地に根を下ろして生活している。これまで見てきたように、華人会館、中国新移民社団という新旧の華人組織は、それぞれが同様のネットワーキングを実施しているだけでなく、近年は双方のネットワーキングも活発化させている。

マレー系国家に囲まれながらも華人人口の割合が高く、東南アジアにおいて異質な存在であるシンガポールでは、外国人や中国新移民も含めた多民族の融合が国家存立の根幹であり、同時に強みともなる。戦略を成功させる条件として「天の時」、「地の利」、「人の和」が大切だが、「人の和」が最も重要であると孟子が説くように、シンガポールでは毎年8月9日の独立記念日（ナショナル・デー）を盛大に祝うなど、政府も「人の和」を重視している。華人会館と中国新移民社団の相互連携の動向は、民族融和や多文化共生の観点から注目すべき事柄であるだけでなく、これからのシンガポール華人社会や国家としてのシンガポールの継続的な発展にとっても非常に重要なカギとなるはずである。

さらに、リー・クアンユー元首相が提唱した世界華商大会の発展や2015年11月の歴史的な中台首脳会談に見られるように、シンガポールはいわば「華人社会のハブ」となっており、国家の規模以上に国際社会で大きな存在感を示している。これは経済指標の統計などでは見えてこないシンガポールの大事な一面である。昨今、環太平洋パートナーシップ（TPP）協定等のメガFTAやASEAN経済共同体（AEC）といった国境を越えたネットワークが注目を集めているが、それらが時の政権に左右され得るものであるのに対し、従来の地縁・血縁・業縁の三縁に加えて、中国新移民という新しい構成員を取り込みながら拡大していく華人ネットワークは、時代に流されない不変の存在と言えるだろう。

日本の自治体が主に経済方面で活動を活発化させている東南アジア地域においては、その華人が大きな経済的影響力を有している。多くの自治体関係者が、国際的な「華人社会のハブ」であるシンガポールの華人社会を知り、そこから広がる華人ネットワークへの理解が進むことを期待するとともに、本稿がシンガポールをはじめとする東南アジアにおいて、より効果的な施策を展開するための一助となれば幸いである。

参考文献

第1章

文献・論文・報告等

- 山下清海（1988）『シンガポールの華人社会』大明堂
- 唐松章（1999）『マレーシア・シンガポール華人史概説』鳳書房
- 田村慶子（2000a）『シンガポールの国家建設 - ナショナリズム、エスニシティ、ジェンダー-』明石書店
- 顔尚強（2009）『シンガポールの華人社会』シンガポール日本商工会議所 JCCI
- 合田美穂（2013）「華人会館」田村慶子（編著）『シンガポールを知るための 65 章【第3版】』明石書店、pp.58-62
- 岩崎育夫（2013）『物語 シンガポールの歴史』中公新書
- 庄国土（石村明子訳）（2014）「アジア東部の初期華人社団形成における主要な紐帯」『現代アジアにおける華僑・華人ネットワークの新展開』風響社、pp.21-38
- Department of Statistics Singapore（2011），“Census of Population 2010”
- Department of Statistics Singapore（2015），“Population Trends 2015”

第2章

文献・論文・報告等

- 田村慶子（2000a）『シンガポールの国家建設 - ナショナリズム、エスニシティ、ジェンダー-』明石書店
- 田村慶子（2000b）「シンガポールの開発政治」『アジアの大都市3 クアラルンプール・シンガポール』日本評論社、pp.241-263
- 市川哲（2000）「同郷会館の国際化と現地化-シンガポール及びマレーシアの福建会館を事例として-」『史苑』61 卷 1 号、立教大学史学会、pp.9-31
- 顔尚強（2009）『シンガポールの華人社会』シンガポール日本商工会議所 JCCI
- 中村都（2009）『シンガポールにおける国民統合』法律文化社
- 鍋倉聰（2011）『シンガポール「多人種主義」の社会学-団地社会のエスニシティ-』世界思想社
- 岩崎育夫（2013）『物語 シンガポールの歴史』中公新書
- 合田美穂（2013）「華人会館」田村慶子（編著）『シンガポールを知るための 65 章【第3版】』明石書店、pp.58-62
- 駒見一善（2013）「対中国関係」田村慶子（編著）『シンガポールを知るための 65 章【第3版】』明石書店、pp.210-214
- 財団法人自治体国際化協会シンガポール事務所（2011）「シンガポールの政策（2011年改訂版）教育政策編」財団法人自治体国際化協会シンガポール事務所
- 合田美穂（2014）「シンガポールにおける華人会館の変容と新たな役割」『環境と経営』静岡産業大学論集 第20巻・第2号、静岡産業大学、pp.99-110

- 合田美穂 (2015) 「シンガポールおよびマレーシアにおける華人会館の変容と新たな役割：そのネットワークの構築、現地化およびグローバル化」『甲南女子大学研究紀要』人間科学編 第 51 号、甲南女子大学、pp.105-122
- 一般財団法人自治体国際化協会シンガポール事務所 (2015) 「CLAIR REPORT No.423 シンガポールの民族融和・多文化共生政策について」一般財団法人自治体国際化協会シンガポール事務所
- Department of Statistics Singapore (2001) , “Census of Population 2000”
- Department of Statistics Singapore (2011) , “Census of Population 2010”

ウェブサイト

- NNA (コピティアム～現代シンガポールの華人社会～)
合田美穂『第 1 回 シンガポール華人社会のキーワード「幫」』
<http://news.nna.jp.edgesuite.net/free/mujin/copi/copi01.html>,2000 年 9 月 5 日
合田美穂「第 3 回 宗郷会館の歴史 (上)」
<http://news.nna.jp.edgesuite.net/free/mujin/copi/copi03.html>,2000 年 9 月 19 日
合田美穂『第 14 回 華人「業縁」組織 (上)』
<http://news.nna.jp.edgesuite.net/free/mujin/copi/copi14.html>,2000 年 12 月 5 日
合田美穂『第 15 回 華人「業縁」組織 (下)』
<http://news.nna.jp.edgesuite.net/free/mujin/copi/copi15.html>,2000 年 12 月 12 日
合田美穂「第 16 回 中華総商会」
<http://news.nna.jp.edgesuite.net/free/mujin/copi/copi16.html>,2000 年 12 月 19 日
合田美穂「第 45 回 シンガポールにおける戦前の中国語教育 (下)」
<http://news.nna.jp.edgesuite.net/free/mujin/copi/copi45.html>,2001 年 7 月 31 日
- ニーアン・シティ <http://www.ngeeann.com.sg/zh/ngee-ann-development/>
- ニーアン・ポリテクニク <http://www.ngeeann.com.sg/zh/ngee-ann-polytechnic/>
- 新加坡福建会館 <http://www.shhk.com.sg/zh/our-heritage/>
- 新加坡宗郷会館聯合總會 <http://www.sfcca.sg/>
- 華裔館 <http://chc.ntu.edu.sg/Pages/index.aspx>
- 新加坡華族文化センター <http://www.singaporeccc.org.sg/>
- The Straits Times 電子版
<http://www.straitstimes.com/singapore/work-to-strengthen-social-fabric-pm-lee-hsien-loong-urges-singapore-clan-elders>

第 3 章

文献・論文・報告等

- 市川哲 (2000) 「同郷会館の国際化と現地化-シンガポール及びマレーシアの福建会館を事例として-」『史苑』61 卷 1 号、立教大学史学会、pp.9-31
- 朱炎 (編著) (2000) 『徹底検証 アジア華人企業グループの実力』ダイヤモンド社
- 顔尚強 (2009) 『シンガポールの華人社会』シンガポール日本商工会議所 JCCI

- 合田美穂 (2009) 「シンガポール華人企業家のナショナル・アイデンティティの変容」柴田幹夫・郭俊海 (編) 『アジア遊学 123 シンガポール都市論』 勉誠出版、pp.21-33
- 本田智津絵 (2013a) 「地場企業」田村慶子 (編著) 『シンガポールを知るための 65 章【第 3 版】』 明石書店、pp.257-261
- 岩崎育夫 (2013) 『物語 シンガポールの歴史』 中公新書
- 合田美穂 (2014) 「シンガポールにおける華人会館の変容と新たな役割」『環境と経営』 静岡産業大学論集 第 20 巻・第 2 号、静岡産業大学、pp.99-110
- 崔晨 (2014) 「香港・台湾・東南アジア華人資本による中国への投資」『現代アジアにおける華僑・華人ネットワークの新展開』 風響社、pp.89-117
- 林聯華 (殷娟訳) (2014) 「一九八〇年代以降の東南アジアにおける泉州籍地縁型社団の変遷」『現代アジアにおける華僑・華人ネットワークの新展開』 風響社、pp.517-543
- 梁炳猛 (高天亮訳) (2014) 「一九八〇年代以降の広西籍の華人社団」『現代アジアにおける華僑・華人ネットワークの新展開』 風響社、pp.545-575
- 合田美穂 (2015) 「シンガポールおよびマレーシアにおける華人会館の変容と新たな役割：そのネットワークの構築、現地化およびグローバル化」『甲南女子大学研究紀要』 人間科学編 第 51 号、甲南女子大学、pp.105-122

ウェブサイト

- The Straits Times 電子版
<http://www.straitstimes.com/singapore/chinese-cultural-hub-to-be-ready-in-nov>
<http://www.straitstimes.com/singapore/a-hakka-tulou-for-singapore>
<http://www.straitstimes.com/singapore/hakka-clan-place-to-reopen-as-free-gallery>
<http://www.straitstimes.com/lifestyle/tracing-roots-via-dialect>
<http://www.straitstimes.com/singapore/glitzy-gigs-at-guo-gathering>
<http://www.straitstimes.com/singapore/chinese-community-leader-chua-thian-poh-tops-list-of-national-day-award-winners>
- 中華郭氏網 <http://www.guohome.org/article-660-1.html>
- 新加坡宗郷会館聯合總會 <http://www.sfcca.sg/>
- 華僑銀行 (OCBC) グループ <http://www.ocbc.com/group/>
- 大華銀行 (UOB) グループ <http://www.uobgroup.com/index.html>
- 豊隆 (ホンリヨン) グループ <http://www.hongleong.com.sg/>
- 福建基金 http://www.thehokkienfoundation.com.sg/ch_index.html
- 華社自助理事会 <http://www.cdac.org.sg/>
- 世界華商大会 <http://new.wcban.com.sg/index.cfm?GPID=3>
- 世界華商ネットワーク <http://www.wcban.com.sg/>

雑誌

- 楊以恬「会館青年団与部長対話会」『源』2014年第2期・総期108、pp.32-34

第4章

文献・論文・報告等

- 本田智津絵（2013b）「華人と大陸中国人」田村慶子（編著）『シンガポールを知るための65章【第3版】』明石書店、pp.126-129
- 駒見一善（2013）「対中国関係」田村慶子（編著）『シンガポールを知るための65章【第3版】』明石書店、pp.210-214
- 劉文正（林松涛訳）（2014）「シンガポールにおける中国新移民社団試論」『現代アジアにおける華僑・華人ネットワークの新展開』風響社、pp.337-372
- 一般財団法人自治体国際化協会シンガポール事務所（2015）「CLAIR REPORT No.423 シンガポールの民族融和・多文化共生政策について」一般財団法人自治体国際化協会シンガポール事務所
- Department of Statistics Singapore（2015），“Population Trends 2015”

ウェブサイト

- Department of Statistics Singapore <http://www.singstat.gov.sg/>
- 新加坡華源会 <http://huayuanhui.org/>
- 新加坡天府会 <http://www.tianfu.org.sg/index.html>
- 新加坡貴州同郷会 <http://www.guizhou.org.sg/>
- 華新中文網 <http://www.huasing.org/main.htm>

第5章

文献・論文・報告等

- 劉文正（林松涛訳）（2014）「シンガポールにおける中国新移民社団試論」『現代アジアにおける華僑・華人ネットワークの新展開』風響社、pp.337-372
- 合田美穂（2015）「シンガポールおよびマレーシアにおける華人会館の変容と新たな役割：そのネットワークの構築、現地化およびグローバル化」『甲南女子大学研究紀要』人間科学編 第51号、甲南女子大学、pp.105-122

ウェブサイト

- 新加坡宗郷会館聯合總會 <http://www.sfcca.sg/>
- The Straits Times 電子版
<http://www.straitstimes.com/singapore/once-rejected-from-joining-it-mr-sun-lai-fong-is-now-president-of-the-singapore-hui-ann>

<http://www.straitstimes.com/singapore/chinese-clan-body-gets-more-new-immigrant-leaders>

雑誌

- 新加坡宗郷会館聯合總會「2012 年度傑出會館獎暨優秀會館獎」『源』2013 年第 2 期・総期 102、pp.58-63
- 羅一峰「向新移民張開懷抱」『華匯』2015 年 9 月・第 13 期、pp.6-13

写真

本稿に掲載している写真は全てクリアシンガポール事務所職員撮影のものである

【執筆】

一般財団法人自治体国際化協会シンガポール事務所
所長補佐 与那嶺 一史

【監修】

所長 橋本 憲次郎
次長 岩井 昌也